

高崎経済大学開学50周年記念シンポジウム講演録（抄）

学ぶことの意味 ～あなたにとって学びとは～

In Search of the Meaning of Learning : For What You shall Learn?

総合司会者

根岸麻衣子（群馬テレビアナウンサー）

パネリスト

牛尾奈緒美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

金井 壽宏（神戸大学大学院経営学研究科教授）

北谷 賢司（ワシントン州立大学教授・(株)ライブアジア取締役社長）

高瀬 浄（元 秀明大学学長、高崎経済大学名誉教授）

林 和男（びあ(株)取締役副会長）

平山 雄一（音楽評論家）

アドバイザー

赤羽 良剛（ブレンフォーラム(株)代表取締役）

基調講演

金井 壽宏（神戸大学大学院経営学研究科教授）

ファシリテーター

茂木 一之 教授（高崎経済大学経済学部）

高松 正毅 准教授（高崎経済大学経済学部）

根岸麻衣子：ただいまより、高崎経済大学開学50周年記念シンポジウム「学ぶことの意味～あなたにとって学びとは～」を始めます。私は本日の司会を勤めさせていただきます、この高崎経済大学の卒業生であり、茂木一之教授のゼミ生でもありました、群馬テレビアナウンサーの根岸麻衣子と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

最初に経済学会長の茂木一之教授より、今回のシンポジウムの趣旨をご説明させていただきます。

茂木一之：タイトルは「学ぶことの意味」。大変抽象的で何だろうということになります。今までの大学、あるいは学校教育機関では、どちらかというと「学び」より「学べ」ということだったと

思います。我々大学側がカリキュラムを用意し、そこでお勉強をなさい、ということを言い続けてまいりました。しかし、このような形での「学べ」というやりかたが本当に良いことだろうかと改めて考えてみたい。それが今回のシンポジウムの出発点です。

しかし、たぶん答えはないと思われます。この国の中の、あるいはこの国の将来の社会を展望する中で、我々大学教員が、大学が、学生が、何をどのように考え、何を学んでいるのかを、今日はいろいろな方向から、視点だけでも生み出せたら良いな、と考えております。

今回のシンポジウムは、特定の方向を出すというよりは、むしろ一つのことをいろんな角度から眺めてみよう、そういう趣旨でやらせていただきます。ですからパネラーの先生方には、多面的な角度からいろいろな議論を、しかも活発な議論を楽しくしていただければと考えています。

初めに、神戸大学大学院の金井壽宏先生からプロポーザーということで「学ぶ」、あるいは「学ぶことの意味」についてご提言をいただきたいと思います。

金井先生は著作も大変多くございまして、「キャリア理論」において、私は日本の第一人者ではないかと考えております。キャリアという視点から、あるいは大学で学ぶという視点から、プロポーザーとしてのご提案をお願いします。

金井壽宏：私は経営学者として「キャリア」を研究する前に、元々一番興味を持っていたのはカウンセリングや発達の問題といった臨床心理学です。ひとは一生懸命頑張ろうと思いながら落ち込むことがある。発達しようとする、どうして発達の節目で足踏みをするのかということに興味を持ちました。

パワーポイントを使う前に、大きな話を少しだけしたいと思います。

皆さん方がレンタルビデオを借りるお店にカルチュア・コンビニエンス・クラブのTSUTAYAがあると思います。社長の増田宗明さんは、『『夢なんて』と言う人もいるけど、夢しか実現しない。』という言葉を私に言われました。ただし、この夢にはいろいろな意味合いがある。ささやかな夢でも実現する夢と、実現しっこないのに大げさな夢を言ったために、かえって行動をひるませてしまう夢とあって、後者だと駄目です。「夢しか実現しない」という言葉は興味深い言い方だなと思います。

私の教え子の一人に林洋一郎さんという人がいます。彼が就職活動をしたら、会社の人事部の人が10年後のあなたはどうなっているかを聞く。自分だって10年後を考えるのは難しいのに、そういうことを聞かれると元気がなくなってしまう。林さんは就職活動を始めて一週目でがっかりして、二週目に元気を失った。普段はすごくはつらつとした学生なんです。ところが、その次の週に行くと急にニコニコかつ生き生きとしていた。何か上手く行きだしたのかなと思ったら、「先生、神戸大学を辞めます」って言うんです。「本当の自分の夢はパイロットになることだったのに、周りの人が神戸大学に行くと経営学の勉強ができるし、就職に有利らしいぞって言うので、危うくみんなと同じように就職活動をして普通の会社に行くところだった。でも、やっぱり辞めて航空大学校を受けて僕はパイロットになります。」って言う。私は心配性なので、「いきなり辞めずに休学にして、

航空大学校に行ってパイロットに向いていると思ったら、休学を退学にかえる、そういう手もあるよ」って言ったんですけど。

彼はきちんとパイロットになり、JALにパイロットとして就職が決まり、その次の年にカリフォルニアでトレーニング受け、日本に戻ってきたときにカリフォルニアワインをくれて、この機種に乗ることになっているって言っていました。

夢を求めるのは決して悪いことではないですが、現実とのすり合わせなく、結局はかなわない夢に終わるような生き方は良くないと私は思います。だけど子供のころからの夢でいったんは忘れかけていたものが、キャリアの節目になってもう一度姿を現し、それこそが本当にやりたいことだったと気づく時に、もう一度それになろうと思ったらなれるんだって、そういう話がそこかしこにあります。

私自身は、このままだったら駄目だという緊張感で勉強をしだすこともある。結合している未達成と緊張感、このままだったら具合が悪いという危機感やハングリー精神が動き出すことがあります。いったんやり始めると、こういうことが実現するとうれしいなという希望だったり、達成感だったり、先々の見通しの中で自分がなりたいものに近づくという意味では自己実現だとか、モチベーションを動かすのも、半分は危機感で半分は希望であるというのも大変興味深く思います。

実は学生の皆さんにも、これまで大きな節目を過ごしている人がいると思います。社長になっている人に私がインタビューをしても、大きなキャリアの節目は4つか5つくらいです。だとしたら、長い間働いているうちに10年か、あるいは7、8年に一回くらいはとことん戸惑って、本当に自分のやりたかったことってなんなのかを考え、夢と現実とのすり合わせが起こる。頑張れるときのキーワードの組み合わせが、実は「緊張感と希望」だとしたら、キャリアの節目のキーワードの組み合わせも、たぶんそれと似て「不安と夢」なんです。就職活動を始めた学生は学校で学んだことを踏まえながら、どういうことをやっていけるかなと考えるときに、不安を持たない人はいないと思う。

会社に入るという節目に、夢をまったく持たずに入るということはたぶんありません。「不安と夢」というのが新しいステージに入るときのキーワードだとは、学生の皆さんでは若すぎて分からないと思うのですが、中年っていう意識は人生の大体真ん中辺で戸惑う時期であって、それも一つの節目です。中年でも節目のキーワードはやっぱり「不安と夢」です。

「まさか先生、退職のときまで夢というのがキーワードです」なんて言わないですよって、よく聞かれるんですが、退職に近づいた方にお聞きすると、日本を代表するような大企業で部長さんまで行くような人は、その忙しさの中で犠牲にしてきたものがいっぱいありますから、とうとう時間ができたときに、これをやりたいっていう夢がある。残りは、今まではこんなに忙しかったのに仕事になくなっちゃって暇すぎて大丈夫かなとか。年金の計算は合っているかなとか、そういう心配だと思います。皆さん方は日本史で伊能忠敬の話を学ぶと思います。退職した後、10歳も年下の地理の先生について自分で歩きながら「大日本沿海輿地全図」を描く。一部の人は退職後の節目に、

その人のライフワークに当たる本当の夢を実現しますので、私はいくつになっても夢は大事だと思っています。

私と同年代で親しい慶應義塾大学の高橋俊介さんは、私が夢とか言っていたら、夢よりはもうちょっと具体的な近接未来の目標の方が良いって言い方をします。その夢を思い浮かべると圧倒されちゃって何もできない夢だったら駄目だと。だから、パイロットになりたいと思ってもなりようがないんだったらそういう夢は駄目ですけど、就職するときにになって良く考えて、これが本当にやりたことだって、そう思えるんだったら本気でやれば良い。

Jリーガーは28歳が平均年齢ですけど、戦力外通告を受けたりして辞めた後の適応方面を模索する時期があります。この節目について神戸大学の仲間と一緒に調べています。辞めたときに、もう一度夢と希望がうごめきます。Jリーガーになれて、あるときに戦力外通告を受ける。そのとき、何をやるかってもう一回考えます。

神戸大学で海運論のゼミをやっている八十さんは、お父さんが銀行員で「銀行に行け」って言われても好きなサッカーずっとやるって答えてJリーグから声かかったから行った。最初はガンバ大阪、次にヴィッセル神戸に行ったんですけど、怪我が多くて出場回数がなく、新潟に行って、最後は社会人に戻って外資系の会社の人材開発部に勤務しながらサッカーを続けたのですが、そのときは好きでサッカーをやっていたときのことを思い出せて良かったって言うんです。

その時に、今後指導をしていきたいので教育関係で教職をとるための勉強を通信教育でしていたら、その会社の人たちがサッカーにここまで打ち込んで仕事も手を抜かず、通信教育もきちんとできてすばらしいってほめてくれるんです。ところが、その後何をしたら良いか分からないんですよ、いったん辞めちゃうと、32歳のときです。

一所懸命教育学の勉強をただで会社の人が良くやったって言うってくれるので、お家帰ったときに奥さんに、今度何をやったら良くなかって聞いたら、奥さんが軽い気持ちで、日本で一番難しい試験は司法試験でしょって言うから、あ、そういう手もあるなって、一生懸命やったら、司法試験に通って、弁護士になって今年法律事務所に入りましたって通知をいただきました。

皆さんに申し上げたいことは、学びのスタートは大学だけじゃない、ということです。小学校のときに好きな科目があったり、苦手な科目を克服したり、あるいは勉強以外に打ち込んだスポーツがあったり、何か楽器を練習したり、いったんある土俵でとことん頑張ることを学ぶと、それは一生のエンジンというか、財産になると私は思っています。

大学に入っているいろんな科目をとって、どれもこれも難しいことは難しいと思うのですが、先生との相性だとか、教え方のスタイルだとか、学んでいるコンテンツそのものとかで、自分にぴたりくるものがあれば、そこから関心を持ち出す、あるいは一所懸命にやってくことが、一生の財産になると私は思っています。

私はゼミの募集のときに、どんな領域でも打ち込んだものを一つ、何か持っている人に来て欲しいと言います。ミニチュア・カーだったら誰よりも詳しいとか、プロレスだったら誰よりも詳しい

とか、どんなものでも良いんです。競技ダンスを一生懸命やってみたいとか、自分はバンドの中でギタリストとして一生懸命やっていると、そういう人たちが12、3人いると、自分が落ち込むときにも頑張っている人がいたり、勉強以外にも打ち込むことがあったり、学生時代の4年間を過ごす中で、そんなゼミだと先輩たちから学べます。学生でいる間に学ぶというエンジンがスイッチオンになったら、それを回し続ける努力を皆さん方がすることです。今日のお話の学校で学ぶということ、会社に入っても、たとえいくつになっても学ぶことがあるということにつながっていくと思います。

この後は言いたいことを少しパワーポイントで説明します。

学ぶということで私が一番気にしていることは、学生が言うことをよく聞くこと。議論して、相互接触の中から双方とも学ぶことがあるというのが一番理想だと思っています。

200人の学生が受ける「経営管理」の授業でも、どういうときに人は頑張るかということに関して、学者が作ったモチベーションの理論を学ばなくても、自分ががすこしでも頑張ろうとしたときは頑張れるようになったと

か、落ち込んだとか、学生の皆さんが語る言葉があります。モチベーションの理論を紹介しながら、学生が言う言葉を聞く。

リーダーシップに関しても、自分は文化祭の実行委員長をやったことがあるとか、もっとささやかに旅行するときに自分がリーダー格になったとか、もう少し日常的なものも含め、自分がリーダーシップをとったときに、こうやればみんながついてきたってことを語るようなキーワードをあげます。特にリーダーシップを取った経験がない人でも、この人だったらついていっても良いと思っ

成人学習、成人教育、成人発達の研究

- 教育学の分野で、仕事の世界がもっととりあげられたほうがいい。
- 米国、英国の成人学習の文献では、半分ぐらいのウェイトが、HRD(企業での人材発達)
- ところが、日本の教育学部では、学部名を発達科学部にしていても、そこが弱い

学ぶ

- 学ぶ側
- 教える側
- 学校の間の教える側 先生、友だち、書籍、趣味、クラブ活動
- 会社に入ってから教える側 上司、先輩、人事部、仕事そのもの、お客様、お取引様
- 学校の間も会社に入ってから、社会活動から学ぶこと

た人の特性です。それを表すキーワードを書けば、学生さんが自分の頭で考える。経験と接合して習うことが理論の意味のある学び方があると考え、そんなやり取りをしています。

科目による違いがあって、私たちは経営学部なので、ミクロ経済学を応用している経営学の分野とか、経済学の応用分野とか、原価計算とか財務会計とか、正解が一つあって客観問題が作れ大学院生でも先生の代わりに採点できるような分野と、リーダーシップとか

モチベーションとかキャリアとか、ものを見る見方に関しては学ぶことがあっても自分の経験や自分のこれからの生き方と接合しないと学んだことにはならない分野とでは、インタラクションの違いが大切だと思っています。

私はいくつになっても学ぶことが続くことが一番大事だと思っています。皆さんは学生で、22、3歳だから、30になっても、40になっても50になっても60になっても70になっても、人が発達し続けたり、学ぶということがあることがピンと来ないと思います。「アダルト・ラーニング」とか「アダルト・エデュケーション」という分野があって、私が学生とリーダーシップのやりとりをするときでも経験との接合をやるんですが、その相手が、例えば松下電器産業の45歳でGMという部長クラスになっている人でしたら、頭ごなしに誰かが言っていることを学んでいる場合ではない。私はこう思っているっていうのとフィットするような理論と、その裏づけを持ちながら自分なりの持論を持つやり方でやっています。

皆さんがもし教育学について授業かなんかで少しでも学んだことがあったら、どのテキストにも書いてあることですが、教育には「引き出す」という意味と同時に「鑄型にはめる」という意味合いがあります。教える側に自信があったらこれが正解ですってことを鑄型にはめるような教え方をしても間違いはいない。だけど知っているはずのものを引き出すっていうのも教師の役割なんです。ですからソクラテス、アリストテレス、プラトンの昔の時代から知っているはずのことを引き出すような教え方をソクラテス・メソッド、知っているはずのことを話して言語化するのをお手伝い

学ぶことの意味を

- 学生に教えるだけでなく
- 教える側が、自らもいつまでも学ぶ意味を考えて、実践していないといけない。一学ぶのをやめたひとからは学べない
- 学びの連鎖

5

するのが先生の役割だとする考えがあります。

独特な教育観ですが、プラトンはアナムネーシス、無理やり訳すときは「想起」と訳しますが、学ぶってことはもともと知っているはずのことを思い出すだけなんだという考えです。ですから、全部を頭ごなしに教えるんじゃなく、頑張るっていうことはこういうことだなんて、学者が作っている理論を聞きながら、そういえばこうなっているなと自分がくぐってきた経験とつながった時に、

しかもそれが実際に役立つ理論になったときに学ぶ喜びがあるのではないかと思います。

私は、学部のとときは教育学部で臨床心理学を勉強したので、身の回りに思考とか感覚とか臨床とか発達とかをやっている人ばかりでした。根っこはそこにあるんですが、大人になっても学習が続く分野の文献を見ていて一つだけ残念なのは、あんまり会社のことを研究しないことです。教育学部で発達の研究をやっている人は、企業とか、競争とか、産業が嫌いで、教育学部をわざわざ選んでるんです。

ところが米国のアダルト・ラーニング、大人になっても学習を続けることに関する文献の中で、

半分の議論は会社の中に入った人がどう発達するかなんです。私は今、教育学の分野で生涯にわたる発達の研究をやっている人と一緒に、人はいくつになっても企業の中で皮剥ける経験があることを私自身が実際にインタビューをしていますので、それらを結びつけるような研究をしたいと思っています。

例えばハウス食品の社長に小瀬昉（おぜあきら）さんという人がいます。本当は広告代理店で宣伝を作りたいかったんですが、さらに大元では、映画の制作に興味をお持ちだったのですが、就職活動ではその世界に入るのはむずかしかったそうです。次に好きなのがおはぎとカレーだったのでハウス食品に入った。社長にまで行くような人でも入社へのきっかけはそれくらいおだやかなことがある。皮剥けた経験を一つ一つ聞いてくと、最初は吃音があってもってしまいうんで、いつか苦労するなって思っていたらちゃんと人の前でしゃべれるようになったとか、売り上げの半分以上を占めるカレーのブランドマネージャーを若いうちに体験したとか、もともとは広告をしたかったので、ちょうど宣伝管理の仕事がきたとか、当時の浦上社長という人が本当においしカレー作るには水がおいしくなきゃ駄目なので水が商売になるかどうか考えてくれて言うので、非常に苦労して「六甲のおいしい水」を作った。役員になって以降は、

仕事の世界での学び(リーダーシップの習得を例に)Lominger、CCL

- 70パーセント 経験
- 20パーセント 薫陶
- 10パーセント クラス(研修、MBA)
- それでは、成人になるまでの間は、やっぱり経験や薫陶大きいはず。
- クラスだけで学んでいるのではない

6

あえて小瀬さんが得意な分野ばかりをやらせる。社長の器だと思っているから鍛えるわけです。社長になるまでにはまだ、これとこれが足りないと考え、財務を初めとして知らない分野を担当させる。そして、6年ぐらい前に、社長になりました。

これはたった一つの例ですが、いくつになっても、以前は出来なかったことが出来るようになるということがあり、それが発達です。発達の足音が聞こえる、その一つの仕上げる時期を社会人になる前に、学生のときにしているのではないかと思います。ハウス食品の中で小瀬さんが自分のリーダーシップの持論を語り、皮剥けた経験を語り、私がインタビューしたり、広報室の人がインタビューしたり、役員の全員が会社に入ってからどう成長したか、皮剥けた経験を話し、一人ひとりが自分のリーダーシップに対する自分の考えを語っていけば、会社の中でいくつになっても発達するとか、リーダーシップを学ぶことが出来るんだとか、学習の連鎖が社長から若い人の間にも出来上がって行く、そういうのが理想だと思っています。これを学びの連鎖と呼んでいます。

この、70、20、10っていう数字は、私たちの分野で呪文のようによく聞く言葉です。去年、リーダーシップの開発で定評のある会社17社、そのうち4社とはワークショップ方式で会いました。実際に会社を訪ねて議論したのは13社です。経営管部として戦略発想で変革を起こすようなリーダーシップを発揮するようになる上で、具体的にどういう出来事が役に立ちますかって聞くと、7割方

が「経験」と答えます。本で学んだんじゃないくて、ゼロからの立ち上げを実際に経験したとか、いつかは管理職になって大勢の部下を持つと思っており、管理職になりたてのときは担当課長で部下はいなかったけれど、その7ヵ月後に80人の部下を持つようになったりしたら新境地に入ります。そういう経験が7割で、これ“What”ですね。つまり、どういう経験をしたか。2番目は“With Whom”で

す。誰の下で学んだか。同じ経験をくぐってもそこでフィードバックをくれる人、こうやって絵を描くんだとか、初めて部下を持つのは大変だけど、ここを乗り越えると一人でやれるようなスキルを持てるとか、フィードバックをくれる人がいる。

残りの10%が座学です。皆さんが学校の教室で学ぶのもこれです。この数字を見て、「あー、たったの10%か」って言う人がよくいるんですが、みなさんが会社に入ったらすぐに分かります。仮に日曜日を全部休んでそれ以外に土曜の休みが半分くらいあるとしたら、年間300日弱働いて、一割分の日に研修は受けないですよ。一割もウェイトがないと考えたらそこそこ悪くないんです。ポイントは、学生の時の学び方の一部の科目はそうであった方が良く私は思うことです。教室で学ぶ効果が10%であったとしたら、それが自分がくぐってきた経験だとか、あの人にはこんなことを学んだという「薫陶」、すなわち人から学んだことと、それらがつながることが大事だと思っています。ただこれは全科目に当てはまるのではなくて、私がやっているモチベーションだとか、リーダーシップとか、生きて行く根幹に関わる分野だとそうなるんじゃないかと思います。

私も東京大学の市川伸一先生が提案したアプローチが大事だと思っています。今、日本で実際に学力低下問題が起き、上手く勉強したら出来るはずなのに、どうやって良いか分からなかったり、

市川伸一教授が大学に入ったばかりの大学生にした質問調査

Q1 あなたは高校まで、なぜ勉強をしてきたのでしょうか？

Q2 人は一般になぜ勉強しているのだと思いますか？

どちらの問いをしても出てくる答えは同じで、スライドのとおり
もし、高校生、大学生だけでなく、親、先生にも聞いてみたら

→ 先生が生徒のスタディ・モチベーションに対してもつ持論

→ 管理職が部下のワーク・モチベーションに対してもつ持論

13

ワーク・モチベーションでなく、スタディ・モチベーション(勉強意欲)なら、子どもなりに持論を持っている。

- 受験や資格のため、仕方なく
- 学歴や地位を得ようとして
- 親や先生にやらされている
- 勉強ができると優越感があるから
- 他人に負けたくないから
- みんながやっているの、なんとなく
- 先生が好きだったから
- やらないと後で困ることになるから
- 将来の職業に必要な知識が得られる
- 頭の訓練として
- 好きな勉強はそれ自体おもしろいから
- 解る楽しみがあるから
- 充実感が得られるから

12

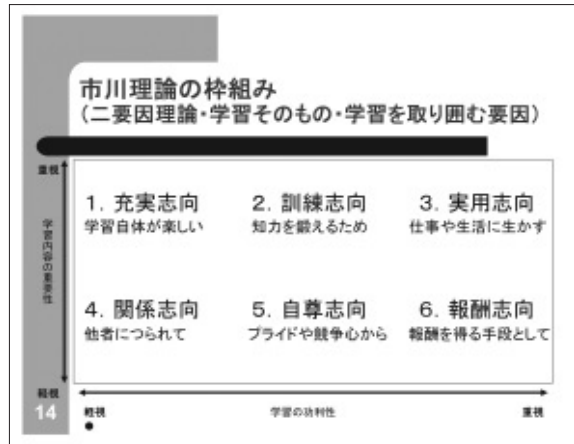
どうやったら良いかが分かってもやる気にならない人がいる。それを何とかしたいと思って研究しました。その時に市川さんは教育心理学会の会長までやった方ですから、出来合いの理論を借り物でとってることが出来るわけです、こういう理論があると。しかし、他ならぬこの国で、学力低下問題がこんなになっているんだったら高校で勉強して大学に入った人の声を聞いたら分かる。市川さんは、学生の生の声を集積する過程で前任校の筑波

大や東大の、高校から大学に入りたての学生さんにどうして勉強したんだって聞くと、彼らなりの言葉で語れることに気づきました。学生さんの皆さんもぜひ、今日終わった後に自問してください。一部の学生さんは勉強なんか面白くないと思っ

て、面白い科目に出会うと充実志向でやる気が出る。好きな野球でさえ千本ノックをやるのだから、勉強も頭のトレーニングだと、鍛えてるんだという風に考えるとやる気になるとか。これは訓練志向。あるいは、勉強なんて役立つはずないと思っていたら、先輩が来て、数学の本を見せられて、この部分は航空工学をやるんだって使ったって言われて、あ、ずっと使う勉強が混じってるんだなって思った。これは実用志向。この三つは、勉強の中身そのもの

に関わるものです。勉強の中身そのものではなく、勉強をとり囲む周辺要因もやる気に影響を与えます。たとえば、周りの仲間。高3の5月6月になったらみんな勉強をやり始めたから自分も受験勉強を始めたとか（関係志向）。好きなサッカーでフォワード争いをして二人ともレギュラーになるのと同じように、勉強でも、英語に関してあいつがライバルで彼が頑張るので、俺も頑張ってここまで来たとか（自尊志向）。最後はごほうび、勉強はつらいけど大学入ったら良いことがあると思って頑張る。あるいは、音楽が好きなのに我慢して勉強してるから、大学に入ったらギターをお父さんが買ってくれるとか、そういうつもりで頑張るとか（報酬志向）ですね。

勉強が面白いということに気がついたとか、頭を使うような訓練志向とか、数学に役立つ部分があるんだってということだとか。みんなでやり始めたとか、相性の良い先生と出会ったとか、関係性の中に学んだり、競争心だとかプライドをくすぐられたり、ごほうびとかです。そこで、市川さん



キャリアはデザインできるのか
ここにも(両立可能だが)ふたつの見方

- デザイン もの、仕組み、職務、組織、キャリアもデザインできるという発想がある
- ただし、節目だけいい
- あとは、ハプンスタンス
- いくつかの決定の先に見えるのは、仕事の世界のはず。もう中学、高校から
- 大学の選択、学部を選択
- ただ、軌道修正はある パイロット 40歳をこえても。定年のときも。伊能忠敬

22

はこの図にある6要因で、モチベーションの理論を作るということをなさって、授業を取っている学生さんは、自分は頑張るっていうときにこの6要因のプロフィールのどこのスコアが高くてどこが低いかっていうのが判断できるようになっています。

私が今年神戸大学の全学共通科目のキャリアのところで、学生に一時間かけて申し上げたことの一番のエッセンスは、キャリアだとか人生の節目ってそんなに沢山はありません

わたしは、だれにも押しつけませんが、自分
はつぎのように考えます。

- 学ぶことの意味を、若い世代にうまく伝えるためには、学んでる学生さんたちをケアしている教員や親、周りの成人が、自分にとって学びとはなにかを、継続して考え、実践してないといけない、ということです。
- 学び続けているひとから、学生は学ぶし、また、学びながら、成人の世界、仕事の世界を展望することもできる。

30

から、この節目だけは自分で選び取ったという気持ちを持てなかったりするとふっと流されちゃったりする、その一言だけです。一部の学説では、キャリアを計画するとか、デザインするとか大変なので、あとはその世界に入ってみないとわからないので、「犬も歩けば棒に当たる」で良いんだって言う人もいます。これは変な言い方ですけど、「計画された偶然性」って言います。慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスで総合政策学部の高橋俊介とい

うキャリアの研究をやっている先生の授業を受けていた、富士通に就職が決まっていた女性で、理科系的な発想もできるし、プログラムも好きだし、いつかSEになりたいと言っている人がいたそうです。その女性が先生のところ来て、本当にSEに向いてるか分からないんで、どうしようかって思っていますって言うんですが、もう、そこまで行ったら入ってみるしかない。入っていろいろやって自分がここだったら面白そうってものが見つかるまで頑張ってもらったら良い。

大学でこの話をしたときに、クラスではモンベルというアウトドア・スポーツ用品会社の創業者で社長の辰野さんの話を見てもらいました。辰野さんは大阪のすし屋のせがれに生まれて国語の授業でアイガー北壁を登った人の話を聞いて、自分もいつかは必ずこの山を登りたいって思う。大体半分の人が亡くなるアイガーの北壁の登頂に成功し、次は商社に入って繊維のことを学んだ後に、いつかアウトドア・スポーツと登山教室の会社を作りたいと思って自分で起業して、今はモンベルという会社の社長をやっています。

要は、夢を抱くといってもとてつもない人の例ばかりをあげては問題ですが、これだったら実現できるって夢を、しかし、やたらと小さくまとまりすぎるんじゃないくて、ちょっと背伸びしたら出来るくらいの夢を持ってほしいです。どう実現するかっていうのを、節目だけはしっかり考えて選びとってほしい。そういう時に学校時代に学んだことのコンテンツだけでなく、分野がどこであれ、どこかの土俵で頑張るっていうことを学んだりとか、ひとりで頑張ったんじゃないくて仲間と共に成し遂げたりした経験があるとか、大学祭で一緒にお店を出したりした経験とか、そういうのが全部大事だと思います。

根岸：それでは、本日のパネリストの方々をご紹介します。まずはただいまご講演いただきました、神戸大学教授の金井壽宏先生です。音楽評論家の平山雄一さんです。明治大学情報コミュニケーション学部准教授の牛尾奈緒美先生です。ぴあ株式会社、取締役副会長の林和男さんです。株式会社ライブアジア取締役社長でワシントン州立大学コミュニケーション学部、メディアマネジメント学教授の北谷賢司先生です。高崎経済大学名誉教授で元秀明大学学長の高瀬浄先生です。以上6人のパネリストの先生方でございます。

前半は就職を目指す大学生の立場から見た学び。後半はその学生を採用する企業の側から見た学びについてご議論いただきます。前半のファシリテーターを務めますのは高松正毅准教授です。

高松正毅：高崎経済大学教員の高松です。私は、就職を控えた大学生の立場からしゃべらせていただきます。

今、金井先生のお話を伺いまして、こんなところに注意を引かれました。

座学での学びが10%であること。その10%を多いと考えるか少ないと考えるかはまた別の問題として、教室の中というか、学校の中で学ぶのはせいぜい10%であるということです。

それより前のお話では「夢」というお話がありました。夢は達成できなきゃしょうがないんだというお話もありましたが、「夢」ということで私がすぐに思い浮かべるのは、「ラ・マンチャの男」という舞台というかミュージカルがありまして、その中で「インボシブル・ドリーム（見果てぬ夢）」という歌が出てきます。あれに僕はすごく感動してしまうんです。

ですから、後半ですべき話から入ってしまうことになるんですけども、人生の節目というといろいろあると思います。「びあ」の林先生、林先生はあまり大学に行けなかったと、そういったところからお話いただきたいのです。「びあ」を始めたときには、これはもう一生の仕事になるという感覚があたりになったのですか？

林和男：大学というアカデミックな場は私は好きではありませんし、馴染めもしませんでしたので、大学に入ることの意味を社会に出るまでの4年間に自分のやりたいことをきっちりと戦略を立て、大学を卒業する時点で自分の夢というカビジョンを実体化させていくための場であると、そういうふうに捉えていました。今のご質問でいえば、大学に入った当初から自分は何をやって人生を生きていくのかということはある程度定まっていました。現在まで結果的に上手く行っているわけですが、ここまで上手く行くとか、自分の会社が一部上場企業になるとか、そんな具合に思って始めたわけではありません。もともとは単に「好きなことをやる」という考え方でした。好きなことを好き勝手にやる、このことが一番強いんです。もちろんそれは「言うは易し」で、皆さんの誰もがそれを出来るわけではないでしょう。しかし、この与えられた4年間の中で好きなことを自由にやるためにはどういう準備をしていけば良いか、ということを考えるのがポイントではないかと思います。学びということからやや外れてしまいましたが、私は大学3年のときに「びあ」を始めました。大学の勉強とは縁が薄かったので、そういうスタートを切ったわけです。

高松：大学の授業はいかがでしたか？ 幻滅したのかどうか。大学に入って授業に何を感じたか、ということですが。

林：私は入ったときから大学にはほとんど行っていません。ですから実際に授業を受けてみて幻滅したとかではなく、私がやりたいことは大学で学べることではないということが前提でした。大学に行くとはどういうことかという、その4年間は社会に出る必要がないですね。4年の間だけは自分の判断というか、社会に出るまでの準備期間であると考えました。そう考えれば大学はこの大学でもどの学部でも良いのですが、一応は社会的に名前の知れている大学に入って、自分の

4年間をどうして行くかということでした。だから幻滅とかそういったことではなく、自分の好きなこと、好き勝手にやりたいことがいろいろあったということだと思います。全然参考になるような話ではないですね。申し訳ありません。

高松：いえ。それでは次は大学教員の立場から。牛尾先生、牛尾先生は今でこそ大学の先生でいらっしゃるんですけども、学者学者した人生ではなく、ストレートに来たわけでは全くないと思うのですが、今のお話を受けて、どのようにお感じになりますか。

牛尾奈緒美：私はもともと慶應大学の文学部の出身でございまして、現在の専門は経営学ですけども学部は仏文科でした。なぜ、仏文科かといいますと、当時の私は特に深く考えていませんでした。慶應大学の仏文科ならカッコイイだろうと。「いいじゃない、素敵で」っていうそのくらいのノリでした。英語は好きだから自分で勝手に勉強するけれども、フランス語はやっぱりちゃんとした専門課程に入らないと勉強しないだろうしなって考えて。フランス文化も好きだしっていう感じで。

私の学部生時代というのは雑誌「JJ」の時代だったんですけど、そのころの本当にちゃらっとした女子大生のノリで仏文科を選んだわけです。仏文科ではそれなりにすばらしい先生方のすばらしい講義を聞きながら、わあ、なんて優雅な世界なのかしらっていうことで勉強して、フジテレビのアナウンサーとして就職しました。ですので、別にフランス文学を学んでいたからフジテレビのアナウンサーになれたってことはまったくございせん。大学を出た人であるという資格としての意味で、大学の課程を終えた人だということで、なんとか就職することができた。

私は6年程、フジテレビのアナウンサーとして仕事をしました。今でしたら「めざましテレビ」という番組を朝の6時、7時ごろにやっていますね。私は、あの枠の朝のニュース番組のキャスターや、露木茂さんという方をご存知の方も多いかと思いますが、露木さんの隣に並んで、お昼のニュースを伝えたり、10時ごろの情報番組の司会をさせていただいたりしていました。

アナウンサー時代は生番組の出演以外にも国内外の様々な取材に出かけて行ったりと充実した日々だったんですけども、私はとても古風な女でして、やっぱり結婚退職したいわっていう気持ちがあって、ご縁がありましてね、結婚してくれるっていう人がいたのもですから、それでウキウキと結婚退社をしてしまったんです。

専業主婦生活は3年間でしたが、憧れて専業主婦になったわりにはどうも居心地が悪い。私って今まで何だったのかしらって、急に考え始めました。新婚で、一番幸せじゃなきゃいけないときに、過去をいろいろ考えました。考えてみれば私は大学に入るためにすごく勉強したわとか、大学でだって頑張って成績もこうだったじゃないとか、いろいろなことを考えました。専業主婦で今やっていることって、今までの私の学びと比べたら何なのかしらって思い始めました。これから先このままずうっと単なる主婦で私は行くのかなと思ったら急にさびしくなりました。自分の人生をこれから自分で切り開いていかなきゃいけないと急に思い立ちました。周りからは、「子供を産んじゃえば良いのよ」という、専業主婦の先輩達からの声もあったんですけど、そういうことではなく、もう一度自分に向き直らなければいけないと考え、経営学の大学院、つまりビジネススクー

ルに突如入学することに決めました。

そこで、壮絶な2年間のMBAコースの勉強をしました。これはまさに将来を見据えての実学的な意味での自分の身になるための勉強ということで、仏文科時代の勉強とは違う意味で、私ははじめに勉強しました。2年間それをやりまして、そこで就職するという選択肢もあったんですけど、私には家庭もあるし、そこで外資系の企業とかに入ってしまったら、ちょっと自分のワーク・ライフ・バランスとしては厳しいかもしれないなどといういろいろ考え、やはりアカデミックな世界、大学の先生になれば良いかなというふうに憧れが出てきました。そこから博士課程にさらに進学しました。そこでも苦しい勉強の日々があって、いろいろ学びというものをいたしまして、運良く大学教員の職を得ることができました。

そういった紆余曲折の果てに今日のこういう立場に至ったわけです。ですから、自分が大人になって結婚してから学んだ、その大学での「学び」と、学部生時代の「学び」とが全然性質が違っていたので、そういう意味では、大学という学びの場で自分は何を取って行きたいのかという自身の姿勢しだいで、大学は懐が深いというか、いろいろな過ごし方が許されているし、いろんな受け取り方ができると思います。

先ほどの市川理論ではありませんけれども、好意的な意味で6つのタイポロジーというのはすごく面白いなって思いました。いろんな局面で、自分の好きなことを取っていけば良いと思うんです。私は何になりたいのか、簡単に言えば私は幸せになりたい。だったら、そのために大学というフィールドで自分にとって必要な学びを、知識というものを取ってきた。そういうプロセスが、これまでの自分を振り返ったときにあったと思います。

高松：フジテレビの女子アナなどといいますと、何が悲しくて、わざわざ苦しい勉強をしてまで、大学の先生になるかっていう感じが私は直感的にします。牛尾先生は結婚して専業主婦をしていて、勉強のやり直しということになったわけですが、何かきっかけはあったのですか？

牛尾：本当に専業主婦が向いていなかったことがあると思います。専業主婦でいらしてすごく幸せにしてらっしゃる方って沢山いらっしゃるの、私には専業主婦という立場やお仕事を軽視する気持ちはまったくないんです。それはすごく素敵なことだと思っているんです。しかし、私には合っていなかった。

何がそんなに合っていなかったかという、まず、それまで自然にフジテレビジョンアナウンサーという肩書きを持って、それこそ、総理大臣からオリンピック選手から人気タレントから誰にだって会える、誰とでも一社会人としてお会いできる、そういう立場があった。そのことは自分が仕事をしている上で当たり前のことだったんです。ところが、主婦、奥さんという立場になった瞬間に、その社会的な自分がなくなってしまい、「牛尾さんちのお嫁さん」、当時は子供はいませんが、きっと子供が出来たら「なにになにチャンのママ」という形になって、対外的な場所で人と会っても、ああ、そういえば牛尾さんのお父さんとこの間会いましたよ、とか、ご主人お元気ですかとかしか言われぬ。あれっ、私はどこって思うような、私って今まで何だったんだろうっていう。

なんか付属物になってしまったようで、手紙を書くときにはうちの主人の名前のとなりに小っちゃく「内」って書いて、自分の名前は「ない」みたいな。「あ～あ、私いなくなっちゃった」っていう。

それで、「あ～あ、もうやだっ」って思ってテレビをパッと付けると、昨日まで私がそこに出ていた番組に別のアナウンサーが出ている。も～、それがたまらなく悲しくて、私このままじゃ本当に気が狂うんじゃないかっていうぐらい。その鬱憤を全部主人に「あなたのせいよっ、どうしてくれるのよっ」なんて、本当に筋違いな怒りをぶつけてみたりとか、いろんなことがあったんですけども、そうやって初めて自分ってそうだったんだなって気がついて。そこから脱して行くには何をしたら良いんだろって考えました。「アナウンサーやってれば良かったのにね」とか、「もったいなかったね」とかってことも人からいっぱい言われたんですね。それもまた悔しくって悔しくって。

そこで、アナウンサーを辞めたからこそなれるものにならなければ自分は絶対に納得できないと思いました。だから、私の場合はアナウンサーの次にどこかのフリーアナウンサーの事務所に入るという選択肢はありませんでした。辞めたからこそなれる何かを考えた時、「そうだ！ 勉強がしたい」とすごく思ったんです。それには、やっぱり今まで自分はちゃんと勉強してこなかったっていう思いがあったと思うんですけど、今はまだ若いし、今こそ時間はあるしっていうことで、本当につらかったんですけど、その時には爆発的なエネルギーが出ました。だからこそ、こんないろんな勉強ができるんだっていうくらい、気持ちが切り替わったっていうんでしょうか。専業主婦3年間に積みもったすべてのものが爆発して、ビジネススクールではもう本当に死に物狂いっていう感じになりました。

高松：その主婦のときの体験っていうのは、今先生が研究していらっしゃるジェンダーということに当然関わっているわけですね。

牛尾：そうなんです。性別役割分業というものを身をもって体験しましたので、それに対する疑問や関心が大きくなっていきました。たとえば、テレビ局といったマス・メディアの世界って本当に自由に闊達で、確かに組織はすごく躍動していて、とても良いと思うんですけども、女性の活躍は制限されていて、すごく男性中心です。

しかし、そのことにも勉強することによって気付いたんです。あの環境ってのはおかしかったなって。今まで自然だと思っていたけれど、違うんじゃないかって問題意識がそこから湧き上がってきた。勉強によって、現実の問題点が本当に見えてきた。ですから、さっきの7に1っていう話は、その1が実は大きいんです。経験自体の解釈が変わるんです、その1によって。1があったからこそ7が違って見えてくるっていうことがあるので、私は1は絶対に軽視できない部分だと思います。

高松：同じく大学教員のお立場から、北谷先生。北谷先生も極めてユニークなプロフィール・経歴を含めてお話したいのですが。

北谷賢司：私の専門はマーケティングです。ワシントン州立大学ほかにインディアナ大学ビジネ

ススクールの教授もしています。

私はもともと日本で医師を志望していましたが、三流医大にしか入れなかったのが、親父にビタミンを売るあやしげな町医者になかなれないぞって脅かされまして、それで東京に出て不良をやっていました。高校時代の友人はみんな私立医科大学に入ってシボレー・カマロやマスタングとかを買ってもらって、六本木あたりでそれこそ牛尾先生ご出身の慶應仏文科のお姉ちゃんたちを捕まえては毎晩遊んでいました。私は偽医大生でその連中と一緒につるんでバカなことをやっていたわけです。しかし、やっぱりそれじゃいけないということで非常に葛藤がありました。

アメリカの放送ジャーナリストでエドワード・マローという人物がいます。放送ジャーナリズムを組織として確立した人物で、マッカーシズムもテレビを介して壊滅させた人です。ある日、そのエドワード・マローの伝記を読んでいてハタとひらめきました。

自分はオンエアーに出たいわけじゃないけれども、放送ジャーナリズムをどうしても勉強したくなった。父からは当然「お前は逃げているだけだ」と批判されました。しかし、生まれて初めて一生懸命頑張って、当時はまだ日銀発行の外貨買い付け票が必要で、簡単には海外留学に行けなかったんですけれども、英語も勉強してマローの母校であるワシントン州立大学に進学しました。

そうして一生懸命放送ジャーナリズムを勉強して帰ってきたら、ちょうどオイルショックで、日本の放送局はどこも社員を採用していない。政治家の支援で、あるキー局に入れるようにしてもらったのですが、どう考えても、日本テレビ、フジテレビ、TBSに比べると当時は三流放送局だったんです。そんなところで一生やっていたら何のためにアメリカに行ったのか分かんないって思い、弁護士の資格を取ろうと思い立ってアメリカのロースクールに戻りました。ところが、外国人だから大学院は修了できても法曹協会の資格試験は受けられないという問題につき当たりました。今は外国人でも大丈夫です。しょうがないので、弁護士になるためにはどうしたら良いのかを調べると、博士号を取れば国際法廷で国際通信連合関係の国際弁護士にはなれると分かった。それで博士号を取ったわけです。

その結果何が起こったかといいますと、ちょうど1980年ぐらいに、日本で第一次ニューメディアブームというのが起こりました。ケーブルテレビだ、衛星放送だって、私を一旦はリジェクトした日本の放送業界が、海外でそういったノウハウを持っている人間が必要になったんです、突然ですね。私はちょうど助教授になったところでしたけれども、突如として日本のそうそうたる放送局が今度は私を求めてアメリカに来て、話を聞きたいということになりました。その後、日本テレビの顧問をやり、TBSでメディア総合研究所の社長に就任し、主に国際放映権の交渉業務を行いながら、大学の教授も続けていました。

次に、ある商社の紹介で後楽園スタジアムが東京ドームを建設することになったので、野球だけをやってたんじゃ600億円の赤字になるので、これからは自社で幅広く興行を展開していかなければいけない。あなたはそういうものの専門家みたいだから助けてくれという依頼がありました。そこで、アメリカの大学の教授と兼務で東京ドームの取締役をニューヨークから12年間続けました。

マイク・タイソン、ローリング・ストーンズからマドンナまで、みんな呼んできたのが私の仕事だったんです。

それが大体収束しかけたときに、今度はソニーが、映画会社とレコード会社の経営の把握がどうも上手く行かないということで、当時の新社長が日本人でちょっと強面のやつが一人必要だから来てくれって言われました。私は居るだけで威圧感があるようですから、外人を脅かすにはこいつが一番良いだろうということで、それで北米ソニーのナンバー2になりまして、レコード会社や映画会社の整理を手伝いました。それと平行して北米グループ企業のマーケティングをまとめる役職でしたので、セリヌ・ディオンを売り出したりとか、スパイダーマンの宣伝広告などに年間で大体680億円ぐらい使われる宣伝広告費の総括を務めました。

このように、今までの人生では多種多様なことを経験したのですが、私が必ず守っていたのは大学との関係を絶やさないことです。どんなに忙しくても一学科一講座は必ず持ち、どこかの大学で教えることを続けて来ました。それはなぜかといいますと、学ぶ意義ってことはもちろんあるんですけど、教える意義っていうのもとても大きいからなんです。教える意義がなぜそんなに大切かというと、教える責任のある人間は自分のノウハウを必ずアップデートしていないと学生に対して申し訳がない。つまり、今学期教えたものが前学期と同じものだと学生に対してすごくアンフェアであるし、それは裏切りなんです。特に我々のようなコミュニケーション学とかコミュニケーションの経営とかメディアの経営というのは日々変わりますから、自分のノウハウを常にアップデートしないと教えられない。普通ビジネスマンだけやっていると、なかなかそういうわけにはいきません。日々忙しいですから、理論的な視座から産業を解析することも、本を読むことも、ついっいできないんです。ところが、大学で教えなきゃいけないと思うと、無理やり本を読んだり、それからもともと大学のときの発想に戻って事象を解析、分析したりします。それはやっぱり、私の人生につながっていると思います。今は日本に帰ってきてしまいましたけれども、毎週東京からビデオコンファレンスで32人の学生を教えています。私が2時間くらい教え、あと1時間は業界のエキスパートに、ロサンゼルス、ニューヨーク、ロンドンなどからが多いですが、ビデオに入ってもらい四元中継でワシントン州立大学の私のゼミは運営されています。

高松：あまりに波乱万丈のご経歴ですが、今振り返って北谷先生にとって大学の4年間とはどういう位置づけになるわけですか？

北谷：私の場合は、最初から専門教育でコミュニケーション学、それも放送ジャーナリズムを勉強したいというビジョンがあって大学に行っていますので、その目的を達成するために一生懸命勉強しました。ただし、アメリカの大学でも日本の大学同様、そういう専門教育を学びたいという意思があっても、約3分の1はまったくコミュニケーションとは関係のない一般教養を、それこそ化学から、物理学から数学から歴史学から、そういったものを必ず幅広く取らなきゃいけないんです。アンダーグラジュエイト（学部）の学生としては、私もそのときにはそれはすごく無駄で、やっぱり専門のジャーナリズムを勉強しにきたのに、なんでこんなものを取らなきゃいけないんだろうっ

て感じました。しかし、今振り返ってみると、そういった幅広い基礎教養講座を強制的に取らせてもらったおかげで、自分の思考とか、判断力とかが非常に広がったと感謝しています。ですから、大学教授の立場からも専門教育というのはやっぱり非常に重要ですけども、それに加えて、非常に幅の広い、密度の高い、質の高い一般教養のコースを大学は維持するべきだと、経験上考えています。

高松：続いて平山先生にお話を伺いたい。平山先生は音楽評論家という肩書きで、プロデューサーも兼ねているわけですけども、大学で学んだことは音楽とは全然関係ないですよね？

平山雄一：関係ないです。僕は一橋大学の社会学部社会心理学科に入ったんですけども、その当時は非常に珍しい学部でして、ゼミの教授は南博教授だったんです。ちょうどそのころ社会心理学という言葉がはやり始めたばかりで、南先生はテレビの仕事の出演で忙しくて、年間2回ぐらいしか講義がなかった気がします。僕は大学の4年目に、卒論は書いておいて出さなくて、1年留年して5年間行ったんですけども、徹底的に遊びました。そういう意味では人との出会いもあったとは思いますが、でも遊んで遊んでその中で音楽に出会った。遊びに来たのだから、当然この遊びを仕事にする方法はないかと考えた。音楽評論家になるまでに厳しい修行時代っていうのはあまり無かったんですが、自分が人から評論家って言われるまで頑張れば良いかなという感じでした。

今日は夢の話が出てきていますが、僕はミュージシャンになりたいっていう人によく会います。この世には売れてる音楽家と売れてない音楽家、有名な音楽家と有名じゃない音楽家があります。しかし、音楽家は歌を歌えば、楽器を弾けば音楽家だと、そんな風に僕は思っています。自分がやれば、それはある意味で自己実現をしているのです。徹底的に遊んでいろんな人に会ったから、僕はこういう考えになれたんだと思います。もちろんミュージシャンだったら、沢山の人のために聞いて欲しいという、分かりやすく言うところ「売りたい」という人もいますんですけど、売れても売れなくてもその人が音楽をすれば音楽家だと僕は思っているのです。

もう一度戻りますが、なりたいたものに思い至ること。当然自分が大学生のときはそんな悟りきったことは思っていなかったわけですが、今考えてみると、あのときに、いろんな人に会って、こっちの道に進んだので、そのベーシックな考え方を、大学生活の中で培ったんじゃないかと思います。これ学びって言えるんでしょうか、分からないですけど。

高松：いや、それこそ学びだと思います。遊びを仕事に出来ないかということでしたけれども、大学4年間の人との出会いの中で、どんな出会いが自分を形作ったと考えますか？ 自分からある場所に行ったり、人に会いに行ったりしたわけですか？ どんどんと。

平山：僕が大学をどういう場所として捉えたかというところ、やはり、友達を作る場所だと思っていました。例えば鎌倉の友達のところに行って、そこに一週間くらい泊まらせてもらって、そこで僕が読んだこともないような本を彼が持っていて、人とも出会うし、本とも出会う。街をただぶらぶらするだけでもすごく面白かったし。そんなつながりの中で、自分は音楽をやっていたので、例えば京都とか、熊本の大学とかに呼ばれて演奏をしに行ったり、本当にいろんな人に会ったと思うんで

す。

質問への答えですけど、自分がすごく音楽を好きだったし、音楽を含むそういったアート全体が好きだったので、そういうものを志したり、好きだったりする人に自然と、とういかお互い引き合った、めぐり合えたんじゃないかと思います。それをただ青春の思い出としてしまっておくことも出来たのかもしれないですけど。僕も出来れば放送局とかに行きたいなと思っていました。ところがちょうど就職のときにオイルショックで、そのチャンスが無い状態で1年間考えて、だったらフリーランスで行こうと考えました。

この4月から初めて名刺を持ったんです。「エキサイト」というインターネットの会社の取締役役です。みなさんもお存知だと思うんですけど、iTunesとかでインターネットや携帯を使い音楽をダウンロードすることが一大盛業となっています。一曲がとうとう100円を切っちゃって、音楽がほとんど駄菓子状態になっちゃったってことで、ここ5年間ぐらいは非常に心が痛かったんです。でも、それだったら自分がその真ん中に入って、そこで音楽を配信する仕事をやって、IT業界の人にも音楽をなんとか知ってほしいという意味あいもあって、今回、初めて会社に入ったという経歴です。

高松：会場のみなさん、本当は特に学生諸君の質問を受けたいんですけど、こうやって、座っていただいてるおじさんたち、何者だか分からないでしょ。いや、すごい人たちなんだってことです。伊達に長く生きているわけじゃないってことです。

高瀬先生、20年間高崎経済大学の教員をなさって、なおかつ秀明大学の学長もお務めになって、そういう立場から、今までのお話を受けて大学の4年間ということについて一言いただきたいのですが。

高瀬浄：今までお話を伺ってきて少し異なった視点になるかも知れませんが。私は高崎経済大学創立50周年シンポジウムと伺っていたことから、それを記念する大学の在り方や今後の学問の在り方などが話題になるのかと思っておりました。諸先生方のお話を拝聴して少し困惑しているところです。

私の大学生活はかれこれ50年位になるかと思います。高崎経済大学（以下、経大）には40歳の時から20年間お世話になりました。定年まで少し残して一橋大学時代の恩師が千葉県に新しい大学をつくるということで止むを得ず経大を去ることになりました。経大に在職中は経済学方法論と経済学史、演習などを担当しておりました。

私の学問系統は戦前東大で戦後は早大で教授をしていた難波春夫博士と、一橋大学の板垣与一教授の門下生であります。難波教授の元では「国家と経済」、板垣教授の元では「民族と経済」を主として学び、さらに「階級と経済」を加味する形で研究をしてきました。国家の一員として、民族の一員として、階級（階層）の一員として、その概念を質し、それらを総合する意味で「社会科学における人間の問題」を研究課題にしていました。したがって、基本は近代経済学に置きながらも、月並みの近代経済学やマルクス経済学ではなく、私のいう社会経済学の方法によるものであります。それを基盤に、経大では経済学方法論や経済学史を講じてきました。

優秀な学生も多かったので経大時代は楽しい日々でした。名古屋大学や早稲田大学にも長いこと非常勤でお世話になっていましたが、経大の学生はそれらに比べても決して見劣りするものでなく、質の高いものでありました。いま改めて経大関係者や卒業生諸君に感謝し、ここでお礼を申し上げたいと思います。

経大を去って八千代国際大学（後に秀明大学と改称）では、「板垣与一学長－高瀬－北村凡学長（前英国大使）」というラインの中で大学の基礎づくりや組織作りに努めてきましたが、この段階のことで多少なりとも参考にしていただければと思い、二点ほど申し上げたいと思います。秀明大学では1年次後半から2年次前半まで1年間に渡りケント大学（カンタベリー）へ、語学研修のため英国留学を義務づけております。その成果はいまでも良かったと思っております。これからグローバル化ですます国際化し、若いうちに海外生活を経験しておくことが良いことだと思います。就職する際にも有利に作用すると思います。

もう一つは秀明大学では少数教育を生かす上で在学4年間ゼミ教育の実施を必修（1～2年は基礎ゼミ、3～4年専門ゼミ）とし、卒業論文を課しました。これはいろいろな面で、教師と学生との接触を高める上でも成果があがりました。そのほか右も左も何も知らないで入学してくる18歳の学生諸君の初期教育をかなり厳しく行うことが何より必要なことだと思っています。教員に対しては余り狭い分野より、より幅広い教育を求め、余り近視眼的にならぬよう常に「省欲知足」が必要であると考えております。

高松：高瀬先生、いま「省欲知足」というお言葉でしたが、日本はバブル経済を経験し、このところ偽装ばやりです。分からなければ何をやっても良いという世の中になってしまっている。

高瀬：そうですね。モノが豊かな社会になって逆にモラルが失われてきているのではないかと思います。村上ファンドの村上さんやライブドアの堀江さんのように、金儲けのためなら何をやっても良いという方も増えているように感じます。したがって、今わが国で問われているのは「文化文明問題」（文化の矮少化と文明の肥大化とのパラドックス）ではないかと思っております。モノが豊かになって人間のあり方、すなわち「こころ」の問題が問われる時代になった。教育というのは貧しい時代より豊かになった時代の方が難しいのではないのでしょうか。とりわけ社会の価値観が多様化しており、教育の仕方も、すでにお話を伺ったように多様化してまいっております。大学のあり方も階層化が進んで行くと思います。

高松：この辺で、バトンタッチをしたいと思います。

根岸：前半のファシリテーターは、高松正毅准教授に務めていただきました。続いて、後半のファシリテーターは経済学会長茂木一之教授です。

茂木：私も、大学時代9割9分9厘授業には出ませんでした。出ないというか、大学に入って一番うれしかったのが授業に出なくて良いことだった。だから今、なんでこんな商売をやっているのか分からないです。金井先生の問題提起を受けまして、「夢」ということについてお話を進めてまいりたいと思います。私たちの住んでいるこの日本の歴史上、いろんな方がいましたが、最も夢を実

現したのは豊臣秀吉でしょうか。百姓から天下を取ったわけです。ところがその秀吉が亡くなった時の辞世の句は「(露と落ち露と消えにし我が身かな) 浪速のことは夢のまた夢」だった。ちょっと難しい質問になってしまうんですが、夢は実現するものなのか。あるいは、夢はゴールなのか。あるいは、夢ってというのはいつまでたっても夢なのか。平山さん、そのへんはどうでしょう。

平山：歌の世界でも「夢」をテーマにした、例えば井上陽水さんの「夢の中へ」とかがあるんですが、僕が聞いている限り、すぐれた夢の歌っていうのは一回も実現したことがない。夢を見ている途中か、夢を実現している途中が夢で、歌の世界でいくと、今の質問に対しては、夢にはゴールが無いんじゃないかって思いますね。

茂木：私は団塊の世代であることもあり、若い人たちによく「目標を持て」とか「夢を持ちなさい。夢を持って頑張らなさい。」なんて偉そうなこと言ってしまうんです。北谷さん、先ほどご紹介いただいたように、北谷さんは多彩なお仕事をされていますが、多面的な仕事を通して、北谷さんが一番大切にしてきたことは何ですか？

北谷：私が人生で一番重要視してきたのは、学生との接触です。先ほども申し上げましたが、そのことは自己啓発にもつながります。また、人生の満足感というか、最期に何を持って死ぬかということが人生では一番重要だと思います。お金は持って死ねないし、ブランド品は持って死ねません。しかし、経験は持って死ねる。自分が死ぬときに、「あ～自分って本当に良いことしたのかな」とか、「人の役に立ったかな」とか、「ベストを尽くしたかな」ってことが一番重要だと私は思うんです。私の場合、飛行機に乗ることが生活の一部になっています。テイクオフする時にいつも、「ここで死んでも自分は悪いことをしていないかな」、それからもう一つは、私の信条でもある「学生さんたちにベストを尽くしたかな」、つまり「人の役に立つようなことをしたのかな」ということを考えます。

パワーポイントをご覧ください。学ぶとは、最終的にはお金のためにやるのか。ペイチェックをもらうためにやるんでしょうか。それともミッションのために、つまり任務とか、スピリットの伝道とか、そういうことを重要視したうえで勉強するのか、どっちなのか。まずそれを考えなければいけないと私は思っています。

最近欧米でよく使われるフレーズに、“Mission comes from the heart, not just the mouth.” があります。要するに口から出任せで言っても心は伝わりませんよ、やっぱり心からきてるから、仕事、ミッション、任務、伝道というのは果たせるんですよという意味です。この“heart”という言葉は英語では「心」ですが、フランス語では“courage”で、「勇気」という言葉と類義語なんです。ですから、「心＝勇気」です。これは西洋的な考え方かもしれませんが、非常に正しいと私は思っています。

皆さんもご承知のとおり、アップルコンピュータの創業者のスティーブン・ジョブスは一回追い出され、ピクサーというコンピュータグラフィックスの映画会社を起業し、大成功させました。そして、アップルがほとんど倒産するようなところにきて、彼が呼び戻されて、今は i Pod や i

Tunes 事業で大成功を収めているわけです。彼はよく、「ミッションドライバーを雇っている。私はミショナリーを起用するんだ」と言います。つまり、「自分で何らかの認識を持ってミッションを遂行するような人間が、企業運営にも一番重要であるし、それが最終的に社会のために役に立つ」ということを彼は言っています。私はそれは非常に正しい発想だなと思っています。

では、学ぶことの意味は何かと考えますと、学ぶということは、オポチュニティー、何らかのチャンス、機会を見出す力を身に付けることでしょう。それは社会貢献でも良いし、社会倫理を追求することでも良いのですが、それをどうやって自分で見出すか、そのことは容易ではありません。その力を身につけるために皆さんは大学に来ているわけで、それを大学で教えてもらわなければならない。これは先生から教えてもらわなければいけないというわけではなく、学生同士で話し合いながら教わることもあります。機会を捉える能力を養うことが非常に重要です。

もう一つは“threat”を見出す力。これは危険・脅威ですね。何が脅威なのかっていうこともオポチュニティーを見出す力と同時に身につけないと、単にチャンスだけを見つただけでは不完全で、同時に危機も見つけないと、学ぶことにはなりません。でも、本当に重要なことは何かというと、責任ある行動を取る能力を身につけることだと思います。責任ある行動が取れなければ、いくらお金をもうけても、東京大学を出ても、ハーバードを出ても、それだけでは人間の形成は不完全だということです。さらに具体的に言うと、一つはリスクバランスをいかにとるかを理解すること。これは、経済学部で学ぶ皆さんとしては当然のことなんですけれども、他の分野の勉強をする人も、リスクのバランスをどうやってとったら良いのかっていうことを勉強する機会を与えられるのが大学教育だと思います。

二つ目は、これは先生方からの啓蒙があるのかもしれませんが、根気強くアクションを起こすことを勉強する、そのノウハウを身につけるのが大学教育です。三番目には、簡単に落胆しない、めげないことを修得すること。これも非常に重要です。

さらに、クリエイティブであると同時に指導性を発揮するような力を養うこと。学ぶことの一貫にこれが入っていないと、自らクリエイティブにはなれない。つまり、他の人、他の企業、他の役職、他の国を説得する能力に欠けることになりますから、クリエイティビリティを養う必要があります。

最後に、“Technical expertise”つまり技術的なノウハウをいくら学んでも、それだけでは学んだことにはなりません。いかに公認会計士として、弁護士として、優れたスキルを身につけたとしても、それだけで学んだことにはならないということです。そうはいうものの、ビジネスマンとして十分にやっていけるだけの素養・基礎を身につけることも非常に重要です。これが上手く作動すれば、当然財力や権力や社会的地位は手に入るわけです。ただし、それらを人生のゴールにしちゃいけない。それらが学びのゴールになってはいけない。学びの最終的なゴールっていうのはノブレス・オブリージュ、つまり、社会貢献を自分がどれだけ出来るかだと思います。

私の場合は一般の方と比べると恵まれた人生で、確かにある程度、社会的地位とか、金銭は手に

入ったのかもしれない。しかし、それを社会に還元すること。学生のために役立て、自分のそういった経験をシェアして行くことが、より重要だと思います。今ノブレス・オブリージュをモットーに生きているんですが、そういう風に学生の皆さんも考えていただければと考えております。

茂木：金井先生、打ち込めるものを持つということの基盤には何があるんでしょうか？

金井：夢や心配にもスケールがありますが、人間には心配があると動きやすい人と、心配とか夢の大きさに圧倒されて過緊張で動けなくなってしまう人とがいます。北谷先生のスライドを見て、脅威を感じる能力と機会を上手くつかんで行く能力というのは表裏一体だと私は感じました。私たちが漢字で「危機」と書いたときに、半分は危険の「危」ですからピンチですけれども、残りの半分は機会の「機」、オポチュニティーというかチャンスです。このままでは不都合だという気持ちとともに、何かを成し遂げたいという気持ちがあって、学生は学生なりに適度な緊張と、何かを探している期待、でも犬も歩けば棒に当たるじゃなく「行き当たりバッチリ」で、今まで打ち込んだことがないことに打ち込んだら出来なかったことが出来るようになった喜びを少しでも味わえれば、つまり土俵を一步でも経験したら、ほかでもそれが出来るんじゃないかということになると思います。

夢という言葉はすばらしい言葉ですが、同時によほど誤解を受ける概念です。日本のお母さんは子供のことを思い、子どもがプロのミュージシャンになるって言ったら、頼むからやめてくれと言いますが、何人かはなります。私の教え子で小島豊一郎さんという人は音楽が大好きで、電子楽器のローランドに行って、期待どおり音楽好きに囲まれました。でも、すぐには楽器の仕事ではなく法務部配属になったんです。でも、やっているうちに面白くなって関学のロースクールに行って司法試験に通ったんです。思いつめて実現しないままでは困っちゃうんですけど、先ほど「見果てぬ夢」というお話がありましたが、そういうものを持つことが重要です。

セルバンデスの『ドン・キホーテ』でも、主人公のラ・マンチャの男ことドン・キホーテは、水車を敵と間違えたり、宿にとまっているのに城にとまっていると思って家賃を支払わなかったり、やっていることは無茶苦茶です。でも、信じている「騎士道」というものがあって、「見果てぬ夢」というのは、そういう本気で信じているもので、見終えない夢のことを言っているようです。その状態をはたで見てかわいそうだと思いますか。ハムレットみたいに悩みすぎて何のアクションも起こさないよりも、希望が動くことを隠さない方が私はプラスだと思います。悩んでばかりいるのではなく、信じている方向に歩むことが大切です。

よく聞く言葉だと思いますが、「希望を抱いて旅をするほうが、到着してしまうより素晴らしい」というあの言葉どおりです。見果てぬものはあるけれど、歩んでいくとどこかに近づいていく。私の教え子の一人が、自分のやっている仕事がそんなにイヤじゃないのに30歳間際になって転職する人の調査研究をしました。入社したての頃はこの会社で何をやれるかわからないので霧がかかったようなもどかしさがあった。ところがその霧が晴れてしまったら夢も希望も無くなっちゃった。これがそこから出てきたキーワードで、「キャリア・ミスト」とか「キャリア・ホープ」と言います。

見えないところがあるから人生は面白い。いろんなことを努力してたら開けていく世界がある。チャンスがあったら、それをきちんと感知して近づいていく能力と勇気と、同時に、世の中には分からないことがあるので不安だとか心配事がありますが、それを感知する力が重要です。未達成のときに緊張感を持つことと、歩みだすと達成するかもしれない希望を持つというペア、キャリアの節目で未開の境地に入るので不安な気持ちと、夢を持つのがペアであることに對して、私は非常に深い意味合いがあると思っています。

1930年代の脳の研究で分かったのですが、前頭葉のある部位を損傷すると心配だとか緊張がまったくなくなる箇所があるんです。そのときの問題点は、そこを損傷すると、困ったことに目的だとか将来を考えることも出来なくなるんですね。私たちが、どのように心配だとか不安だとか脅威を感じるかというと、一方では将来のことがわからないので心配になるし環境に脅威を感じる。だけど、将来のことがわからないからこそ希望を持ったり目的を持ったり計画したりする。それをダニエル・ギブアートというハーバードの先生が去年出した本に書いています。

私は人を動かすモチベーション、緊張と希望とか、目的とか自己実現、楽しみとキャリア等々を研究して10年になります。もう疲れたなとか、この先大丈夫かなとか思いながら、残りまだ半分あるってわくわくする。いつもこれら両面が裏あわせでこの方面を歩いています。

皆さんがもしも夢など自分にはピンとこないと思ったら、他のタイプの夢っていうものとの取り違えがあるかもしれない。夢なんて実現しないものとか、特別なものだとは思わずに、何か一つでも打てば響くようなことを経験すれば、それが努力する自分の土台という意味での財産になる。そのようなものを探していただければ良いと思います。お話をお聞きしていて、けっこうそこって何か共通点があるのかなって思い聞かせていただきました。

茂木：牛尾さん、大変失礼なことを伺いますが、やっぱり専業主婦では夢や希望は持てませんでしたか？

牛尾：今日お越しいただいている方の中にも、専業主婦をしていらっしゃる方がもしかしたらいらっしゃるかもしれませんが。専業主婦というのは、自分自身に対して夢を持つことが、なかなか難しい立場かもしれないと私は感じました。というのは、専業主婦の目標は家庭の幸せとか、自分が中心にオーガナイズしてみんなを健康に楽しくし、外から帰ってきたときに気持ちの良い家庭を作るとか、そのような非常に利他的なところにどうしても行くと思います。例えば昔風で言えば、夫が出世してくれれば、それが私の幸せであるとか、子供が有名な学校に行って立派な職業に就いたら、私の一番の勲章だとかいった形で、自分の愛する家族の幸せが、自分自身の成果という形になってくると思います。家族を支えるそういう仕事もちろん大切なことだとは思うんです。だけど、私の場合は何か違っていた。

家族を支える仕事はもちろんなくちゃいけない。現在もその気持ちはあって、子供や夫に対し、私ってどんなことが出来てるかな、こんな奥さんで悪かったなっていう気持ち、もうちょっと良い奥さんにならなくちゃとか、もっと良いお母さんにならなきゃっていう気持ちは常にあるんです。

だけど、その部分があまりにも肥大化してしまうと、逆に変に夫のお尻を叩いてしまう奥さんになったり、子供をぎゅうぎゅう追い詰めて、何かあるとキレてしまう子供にしてしまったり、これらはそれが裏返しで出てしまった悲しい例だと思うんです。そんなふうにはならずにニコニコとできる方だったら、それは、そこから得られるその人にとってのやりがいがあるのが専業主婦かなっていう風に感じます。

茂木：先ほどの北谷さんのお話では、「学ぶ」ということは究極的に社会貢献につながるものとしたが、林さん、それを受けて、「社会」という言葉は必要なんですか？ 例えば、子供のため、夫のため、あるいはたった一人の好きな人のために「学ぶ」というのではダメなんですか。

林：それで生きていけるだけの無限の金があればそうしたい。私もそうしたいんですけども、人生はだいたい80年くらいの大変短い時間なわけです。その中で、私の考えでは夢というのはやりたいこと、好きなことを自由にやることなんです。やりたいことをやれば良いし、好きなことを好き勝手にやれば良い。学生時代にそんなことをやっている人は結構います。

問題は、好きなことがあってもそれをビジネスにつなげられるかどうかです。そこに至る戦術・戦略がきちっとしてないと、学生時代にはやりたいことをやっていたけれど、社会人になった瞬間にやりたくもない仕事をするサラリーマンになってしまう人達が大半であるのが今の日本ではないかと思うんです。

パワーポイントをご覧ください。大学というのは、自分が何をやったら良いかの選択をする最後の4年間だと私は思っています。つまり「モラトリウム最終章」です。人間が成長して大人になっていった時に、大人として社会的意義を遂行するべく何らかの役割を人は皆持たなくてははいけない。そのために、そこに向かっていくための最後の猶予期間が大学であり、モラトリウムの最終章だと私は思います。ですから、その間に自分は何をやりたいのかをはっきりさせて行くことが大事です。学生さんの中には自分は何に打ち込んで良いのか分からないとか、やりたいことが分からないとか、そういうことを言う人がよくいるんですがもっと単純に考えてください。好きなこと、やってみたいことを見つける。そこから夢、あるいは情熱を持って自分が打ち込めること、そして志、自分はこうなるんだという思い、そういうものが発生してくるという実は単純な構造ではないかと思います。

大学の4年間のうちに、自分が一生をかけてやる仕事、ライフワークというものについてまず考えてみる。それから次にそれを捜す作業をする。そして見つける。見つけたらそれを戦術化して行くっていう順番になると思います。

「学ぶ」という今日のテーマでも、学内で学ぶということと学外で学ぶということ、大学では二つの学びができます。私は大学の勉強はほとんどしていないと申し上げましたのであまり偉そうなことは言えませんが、少なくとも大学の中では“knowledge（知識）”をきっちりと学んで欲しい。私は今になっても経理が不得意なんです。財務も不得意。これらを在学中にやっていなかったからです。もし大学時代に経済とかファイナンスとか税務とかをやっていたら、もっと優秀な経営者になれただろうという反省が非常に大きい。加えてマーケティングですとか、これからグローバル社

会といわれる国際的な競争になりますから英語も不可欠だとか、そういう“knowledge”のレベルは大学できっちり学んで行くべきであると思います。

もう一方で大学内では学べないこともあります。それらは学外で学ばなければいけない。抽象的な言い方になりますけれども、例えばそれは「社会」とか「人生」とか「世界観」とかです。世の中はどう動いているのかとか、人生って何なんだろうとかを考える。あるいは世界というものについて、自分を中心に物事を考えずに世界観みたいなものを見つけていく。学内と学外は上手くバランスよく、それぞれに学ぶべきことを自分で選択してやっていくべきだと思います。

私は1970年に中央大学法学部に入りましたが、弁護士になりたくて大学に入ったわけではなく、当初から映画という世界に身を投じたかった。当時はたまたま学生運動が盛んなころだったので、そういう流れの中で大学にその波が押し寄せてきた。71年にはかっよく言えばドロップアウト、悪く言えば落ちこぼれになってしまった。映画という自分の夢に向かいまずやるべきことは何かということで、72年に入ったらアマチュアですけれど映画を製作したり、上映会を学内でやったり、大学構内ではなく近くの喫茶店とかそういった場所で評論活動をやったりしていました。

そして、そのころ映画が好きだったことから、ふと思いついたことがありました。それは、映画ファンにとってはいつどこでどんな映画を何時から料金はいくらでその映画館はどこにあるのかというような情報がまず必要だと感じたわけです。そしてそれは映画に限らず、演劇でも音楽でも同じように必要だろうということで、1972年に「ぴあ」という情報誌を創刊しました。私はその時21歳ですからその頃から実業世界に入っていたわけです。当時は学生運動でロックアウトされて大学の中に入れなくて卒論がなかったので、私は74年にどさくさにまぎれて卒業しました。

一応就職試験も受けて某大手映画会社に内定したんですが、この映画会社は映画だけではなく不動産事業とかいろんなことをやっている会社だったので、不動産部門に配属されたいやだなと思って辞退しました。「ぴあ」は最初は全然鳴かず飛ばずでしたけれども、2年位経ってから売れ始めたので1974年にぴあ株式会社を資本金100万円で作りました。

この表紙が1972年に作った「ぴあ」です。学生ですから、お金も無ければ何のノウハウもない。そういう中でこういうアマチュアっぽい仕事が世の中に出て、一万部印刷しましたけれどほとんど売れないというところからスタートを切ったわけです。

私はそれ以降35年間、ビジネスの世界でやってきているわけです。皆さんに申し上げたいことは、起業家精神、つまりアントレプレナー・シップという考え方や精神をもっと日本の若い人たちに身につけて欲しいと思います。もちろん自分で起業するか、あるいは会社という組織の中に入って新しい仕事をするか、選択肢はいろいろあると思います。しかし、基本は自分のやりたいことは何かということなのです。人から与えられた仕事をやるんじゃなくて、自分のやりたいこと、好きなことを仕事につなげて行くことが人生の幸せにつながるわけですから、できることであれば起業家、それも夢を持った起業家であって欲しいと思います。

そのために、私は三つのキーワードを作りました。初めに「遊び」の精神ありきです。遊びとい

うと今は遊んでばかりいるという悪いイメージが先行しますが、実は遊びは想像力の原点なんです。遊ぶことによって想像力は培われます。あるいは直感とか、好奇心とかは遊ぶことで動いているわけです。遊びから始まり、そこで得た感動がすばらしいものであったら、じゃあそういうことを自分でもやってみようという意思に繋がり、意思から仕事が生まれてくる。そういう循環を持っている。一番最初にあるのは「遊び」であると思います。

二つ目には、方法論が「クリエイティブ」であることです。何もないところから新しいものを生み出していくためには、物事の本質を見極めて行く姿勢が必要です。クリエイティブってそういうことだと私は思うんです。そんな中でフロンティア精神だとか、あるいはバイオニア精神とかいったものが身についていて、それが起業という形で世の中にはない新しいものを生み出していくことに繋がって行くと思います。

もう一つは、世の中を面白くしてやろうという「気概」ですね。初心を忘れないで、いつも冒険心を持って未来を見つめていけば、例えば私のやっているエンターテインメントビジネスの世界においては、新しいエンターテインメントビジネスのあり方、その理想像を追求していけるというぐらいに思っています。そんなことが背景にあってドリームズカムトゥルー、すなわち夢が現実化してくることになるのだと思います。

実は、私の夢は映画監督になることだったのですが、それはかないませんでした。その代わりに、日本映画の若い監督たちを発掘・育成する「ぴあフィルムフェスティバル (PFF)」というのを30年間やって来ています。昨年の日本アカデミー賞「フラガール」の李相日君を初めとして沢山の監督がPFFから出ています。ご覧の写真はPFFを始めたころの写真ですが、真ん中でバカみたいに笑っているのが私です。

さて、好きなことをやってそれを仕事にしていくというアントレプレナー・シップ(起業家精神)を考える時には、もう一方で戦術あるいはノウハウがないと単に好きなことが趣味で終わってしまいます。

私はそのノウハウを三つに集約しています。一つ目は、「人集め力」です。簡単に言えば、パートナーをちゃんと見つけること。これは複数の視点でビジネスをやる必要があるということです。

二つ目には、「おじんころがし」。おじんころがしって言う言い方が悪いですが、要するに「先輩」ですね。実際に起業家として成功した人とか、財界で活躍されている方とか、そういう人をたずねて話を聞く。そういうことが必要です。このためには自分自身をプレゼンテーションできる力を身につけることも大切です。

三つ目には「協力者」。この基本はやっぱりその人の人柄なんじゃないかと思います。協力者なしに自分ひとりだけではやっていけません。

次は「金集め力」が必要です。どうやって金を集めるかってことですが、副業を見つけて24時間働き続けるんです。自分のやりたい仕事をやるために他の仕事から収入を得て、それを自分のやりたい仕事につぎこむくらいの気持ちが必要です。

加えて「借金力」。できれば無担保・無金利の金が良いです。親とか親戚とか友達とか、誰でも良いです。とにかく金をかき集める。場合によっては返さなくも取立てには逢わないようなお金を借りてくる、借金の力です。さらには、今は起業をしていくときに、国の企業家に対する助成制度がいろいろありますから、それをちゃんと勉強して自分の力でお金を持ってくる、その制度を利用することです。

そして最後に「精神力」。北谷先生のお話の中にあった忍耐力と大体同じです。ベンチャービジネスって最初は駄目なんです。みんなそこであきらめたり挫折したりして終わってしまう。そんな時に堪え忍ぶ力です。実は夢の強さだったり、情熱の強さだったり、それを支えるのですが、その忍耐力が必要です。

それから「胆力」。ものを恐れない勇気ですね、度胸を身につけているかどうか。気が小さい人ではなかなか難しいと思います。

最後は「献身力」。人のために自分を犠牲にしてでもやる気持ちです。仕事というのは自分のためではなく、社会のためにやる。社会のためとか世の中のために仕事をやっていくのですが、そこに好きなことをどうつなげていくかということです。

「ぴあ」は情報を提供するとか、チケット購入を便利にすることをやってきたわけですが、まさにそういう社会のためにどう役立つかということが必要ではないかと思います。

アントレプレナー・シップについては実は大学ではあまり教えてくれません。一言で言えば実践力みたいなものです。私が大学に望みたいことは、この実践力というものをもっと産学が連携して教えてくれるような仕組みを作ることです。少なくとも大学の中だけではなく、自分から動いて自分でそういう力を身につけていく戦術を具体化していくことが必要です。

求める成果を最終的に得られるかどうかは、その人が持っている情熱の強さ、夢や志やビジョンの強さ・高さ、また意欲・やる気によります。あるいは、くじけない力、加えて考え方です。「好きなことをやれば良い」って言い方は誤解を受けそうですけれども、あることを一生懸命やるとか、真面目にやるとか、社会のためにやるとかそういった考え方を持っていることが、最終的には成果に繋がると思います。

次の写真、これは私が映画をやりたいって思った夢の一つに、フランスの有名な映画監督フランソワ・トリフォールに、どうしても会いたかった。会って話をしたかった。それが、1982年に「ぴあフィルムフェスティバル」の中で実現しました。まさにこれは私の夢の実現であり、今でもこのことは一生忘れない思い出になっています。

人生80年。本当にたった一度の人生ですから、このように自分が何をやっていくのか、興味や夢を明確に見定めて早くそこに向けて準備を始めていって欲しいなと思います。そのために利用できる場所は大学でも何でも思いっきり利用するといったぐあいにしてもらえば良いと思います。

茂木：会場の一部の方を代表して。私は忍耐力もなければ、根性もないし、人様に貢献しようなんて気持ちもない。借金も怖くて出来ない。転がすようなおじさんもない。全部ないです。という

私と同じように、ないないづくしの方が会場にひょっとしたらいらっしゃるかもしれない。

私は学生から「夢がないんです。」あるいは「今何をして良いんだかわかりません。いったい自分は何に向いているのでしょうか。」といった相談を沢山受けます。赤羽さん、赤羽さんは「就職ジャーナル」の編集長を長くやられて、そういう学生に一番会ってきたんじゃないかと思うんです。

私も、最近映画を振興させるための事業共同組合を設立させました。それからイーピック（e-PIC）っていう、これはNPOですけれども、実践企業塾なんてのもやっていますが、「夢」をもてないという人によく出会います。そこで言うんですけれども、ドーも、気持ちが良くない。なかなか夢がもてない。私は何をしたら良いのかかわかりませんっていう学生に、あるいはそういう一般の方に、どう接したら良いんでしょうか？

赤羽良剛：私もこの9つ全部ありません。世間には結構借金が多いんじゃないかって思われているようですが、借金の相手になってくださる方もおりませんし、私ごときに転がされるようなおじさんもいません。自分でも今大学でゼミを持っていて、キャリアみたいなテーマでやっていますからどうしてもご指摘と同様の反応が多くなります。おそらく30年前、20年前、10年前と比べて、ここ数年の大学生の方がはるかに、そのへんのところの自信がちょっとないというか、そういう反応が多いような感じがします。しかし、実は、そんなに昔から変わっていないんじゃないかっていうのが私自身の振り返ってみた全体的な印象なんです。ただ、しばらく前の僕らの世代には、自信が無くてもあるような振りをしたり、先が見えていないのに見えるようなことを言ったりというようなことを、私自身もしてきた、そういう人が同世代には多かったようです。そういうところでいえば非常に正直なものの言い方をする世代だなと思います。

一橋大学の米倉誠一郎先生だったと思うのですが、7、8年前に、何回かお会いしている中で、インタビューでこうおっしゃいました。赤羽さん、今の若い学生たちをみているといろいろ思うところがあると思うけど、よく考えてみて。つまり、バブルがはじけたってのは15年くらい前失われた十何年って言われ方をされてるわけだけど、そのころに物心ついた人たちが今高校生になったり、今大学生になったりしてるんだと。小学校4年か5年で社会に対する物心が付き始めたときにお父さんお母さんは暗いし、親戚も暗いし、社会全体が暗いみたいところで、大人になるまで歩いてきた今の世代にとっては、そんなに甘ったるい、かっこつけた、いきがったものの言い方考え方ができるわけが無いじゃないかと。だから正直に自信が無い、先が見えない、自分が分からないと言っている学生のほうがよほど正直だし、もしかしたらきちっとしたものを持っているんじゃないかと。そう言われたことをよく思い出します。自分自身もそういう自信が無かったし、なんとか生きていくためにはどうしたら良いかなと思ったときに、何人かの人にいろいろ会ってきていろんなことを言っていたことが、多少は生きる知恵になってきているかなと思います。

もう起業家として大きくなって、ほぼ引退された方にこの前大学に来ていただいてお話を伺って、私も学生の前でちょっと思い出話をしたんですが、その人がまだ現役バリバリで企業をガンガン伸ばしているところに、こう言われました。出会いみたいなのが非常に大事だとみなさんおっしゃるけ

れど、出会いにもいろいろな出会い方があるので、一生懸命素直な気持ちでたくさんの人に会いなさいと。ただ、そのなかにも運の良さがやっぱり感じられる人がいると。世間にもそういう言い方をする人がいると。運の良い人の周りになるべくいるようにしなさい、と言われたんですね。この間学生の前で申し上げたのですが、そのことをこのおじさんに言われたのは30年くらいも前だけれども、今になってやっと分かってきたと。運の良い人のそばにいなさいって、なんかオカルトチックなことを言われたような感じが言われたときはしたけれども、運が良い人はある種の自己実現がその時点までに出来ている人なんだから、頑張ってきた実績とか科学的な理由があるんだと。だから頑張ってきて一定の成果以上のものを自分の人生で作った人のそばにいて教わることがいっぱいあるはずだと、というようなことを言われたことがやっと分かりましたと、本人の前ではちょっと恥ずかしいので、学生に向かって言うように横に本人を立てながら申し上げたのですが、ああ、やっとお前も分かったかみたいな感じで、なんとなくうなづいていただいたという次第です。

今日、5人の方々にお集まりいただいて自分としても非常にうれしいのは、そういう今日までとても頑張ってきた5人の方と私がちょっとずつの理解かもしれないかもしれませんが、知り合いになれることが大変幸せだなと思いました。私は自分が、皆さんの前にいる先生方のような潜在能力も無ければ、きちっと頑張るっていう気持ちにも欠ける人間だと長い間思ってきました。頑張って社会的にも大変貢献し実績をお持ちの方々のなるべくならそばにいらさせていたかどうかというようなことを多少心がけてきたことで、何とか今日まで生活出来たのかなと思います。

実はみなさんのお話を聞いていて感激し、ちょっと自分じゃ無理だったなと思います。私自身、何とかここまでにはなるという気持ちだけでここまでになったのではないと思っています。こういう考え方、生き方の人間も中にはいるということをちょっとご理解いただけたらありがたいと思います。

茂木:最初にもお話ししましたが、このシンポジウムは、特定の方向やベクトルに向けて答えを出そうという、そういう大それた考えは持っていません。ランダムにやっていきたい。出来れば、掛け合いみたいなのも良いかなって思っていたんですが。会場の皆さん、ご質問、ご意見。どんなことでも構いませんので、何かありましたら積極的にしていただくと、ありがたいです。何かご意見ご質問はございますでしょうか？

質問者:経済学部3年の伊藤という者です。大きく分けて2つのことに疑問を持ちました。

一つ目は夢に関することです。今3年生なので、今度の就職っていうときに、人生で何回かは新しいことにスタートをする機会になるってことで、いろいろ考えるんです。

今、増加が問題になっている会社に入ってすぐに辞めてしまう人は、夢と現実とのギャップを感じてしまったのではないかなと思うんです。それは牛尾先生がおっしゃっていたように、結婚のときにギャップを感じた。僕自身、夢とかそういうことはあまり考えてなくて、そういう環境になってから、その環境の中で、自分に何が出来るかとかを考えるんじゃないか。だから、その場になってみないと分からないんじゃないかって思っています。こういう考え方は夢を持っている人にとって

は、計画性がないって思われるかもしれない。では逆に夢を持って進んで行く人っていうのは、そのギャップにぶち当たったときに、どう対応しているのかなと思いました。牛尾先生のように新しい勉強、新しい職業にチャレンジできる人もいるとは思いますが、夢を持つときに、どのようにギャップを乗り越えるのか。ギャップにぶつかったときにどう乗り越えて行ったら良いのかっていうことを疑問に思いました。特に金井先生のお考えを聞いて、どう乗り越えているのか、キャリア形成をしてきた人はどうのりこえたのかを疑問に思いました。

もう一つは、質問というより感想です。今回「学び」ということで感じたのは、仕事の世界の学びのところで経験が70%みたいなことを言っていました。でも、そうして分けてしまうことが、学生にとって学びがおかしくなる原因ではないかと感じるんです。僕が今、唯一真面目にやっているのがゼミなんです。ではどうしてゼミが一生懸命出来るかっていうと、経験と薫陶と座学の三つが、同時に出来ているからかなっていう風に感じるんです。

ところが今は、勉強を無理矢理押し付けられてやるっていうのが、一般的な学習になっちゃっていると思うんです。それを変えて行って、これら三つを合体させてやっていくことが大切で、そういう風に分けてしまうことが、今の周りの学生にとって勉強というものを、何かしたくないものにしてしまう原因になるんじゃないかと思います。

茂木：よくある話ですが、夢を持てを言われて頑張るのは良いんだけど、壁にぶち当たったり、あるいは夢敗れてしまったりしたときに、どうしたら良いのか。もちろん、そんなことを最初から考えることが良くないんだって話もあるんでしょうけれども、お話に出てきた牛尾先生、いかがでしょう？

牛尾：夢を持って就職し、よ～し、この会社で頑張るぞって思いながら夢と現実とのギャップでやめてしまう。俗に七五三と言われるように、就職して3年以内に会社を辞めてしまう大卒者が3割（中卒7割、高卒5割）いる時代です。かつてだったらもうずっと我慢し続けて、一生その会社にいるんだろうけれども、そうじゃない判断をする人が増えている、「労働の流動化」とか、そういうこともあってでしょうけれども。私が経験的に思うのは、これから卒業して就職する人は新しい会社や組織で、私にとってそれは専業主婦という環境でしたが、100%満足できる場所は絶対ないんです。おそらくがっかりするところっていっぱいあると思うんですね。なんでこんな上司の下で私は働かなければならないんだろうとか、なんで私は能力があるはずなのにこんな仕事なんだろうとか、やりたいことと違う部署に配属されてしまったとか。少しもうれしくない環境がそこにはある。けれども、ある程度はやっぱり我慢って必要かなと私は思います。そこでやるべき仕事とか、役割とか、様子をよく見て、とにかく一生懸命やってみる。やってみる中で、今まで自分では気づいていなかった良さとか、ここをこう変えたらもっと楽しくなるんじゃないかという部分が、一生懸命やっていくと、なにかしら糸口が必ずみつかるんじゃないか。私も専業主婦はつらいって言ったんですけど、専業主婦もやっぱり良いじゃないって思うところもいっぱいあるんですよ。

友人には専業主婦が多いです。私には専業主婦的な生活もあって、そうじゃないプラスアルファ

は自分で環境に一生懸命働きかけて作ってきたんです。お舅さんとかお姑さんとか夫とか、硬い考え方をしている人たちに対し、私は実はこういう風にしてみたいんだということを働きかけてきた。いきなりではないです。いきなりしちゃうとみんなびっくりしちゃうんですね。専業主婦であって欲しい人たちが、いきなり私が反乱みたいなことをしたら、即離婚だみたいな話になっちゃいます。けれども「大学院で勉強したいんです」と言うと、「ああいいじゃない」っていうことで、やっているうちに、もうちょっと勉強したくなって博士課程に入りました。「ああいいね、なんか高尚で。」こう言うわけです。そこで、せっかく勉強したので、ちょっと就職のアプライもしたくなって、なんと明治大学から採用の知らせが来たって言ったら、舅はイスから転げ落ちました。いったいどういうことなんだって、呼び出されまして、「奈緒美ちゃんそれは偉かったけれど、それを良い思い出に専業主婦をするっていう人生もあるよ」って言われました。夫も、「えっなんで通ったの？コネかなんかでもあったの？」って、ありませんよ、そんなもの。でも、そのくらいみんな驚いちゃったんです。

私はこう答えました。「でも、お義父さんも考えてみてください。私がやってみて、どうもこれじゃダメだってなったら、いつだって辞められるじゃないですか。」って。そうしたら、「そうだな。そういえばそうだ。その時やめればいいな」って言うてくれて、「ちょっとずつやってみます。」っていうことで始めたんです。

今年でちょうど10年目なんですけれど、辞めない方が良くって言われるようになりました。要するに専業主婦とか、お嫁さんってこうあるべきっていうものがあった。そこに私が語りかけることで、みんなの考え方が変わったんです。結果的に良かった良かったと言われるようになって、主婦も続けているんです、私は。ですから、おそらく皆さんが就職して、この仕事はつまらないと感じる。日が当たっていない部署ってことがあるかもしれません。けれども、そこでも働きかけとか一生懸命さで、その部署が盛り上がって行って、違う仕事に変わっていくこともあるでしょう。だから、そこでちょっと我慢してみたい。その中の仕組みとか、仕事のあり方とか、いろんなものを注意深くよく見てみて、それに対して自分がこう働きかけをしたらこう変わるんじゃないかなとかを、ちょっとずつやっていく。それをしても、これはどうにもならないと思うのであれば、もちろんそれは辞めるという決断もあると思います、けれども、即辞めるとかは無いんじゃないか。せっかくの出会いです。私は我慢の練習ということもあると思います。我慢して自分の力をつけていく。それが自分の先々の能力にプラスになっていくと思うので、とりあえず私はやっぱり我慢して、とにかく変えてやるっていうことが、すごく必要なんじゃないかなって思います。

茂木：最近の新しいキャリア理論の中で、「節目理論」ですとか、「計画的偶発性論」とか、それなりに説得力があると私は思っていますが、最近クランボルツっていう人が仕事を好きになりなさい、その仕事を愛しなさいというようなことをキャリア論の中で強く強調しています。

牛尾さんは当初専業主婦が嫌だったから別の道へ行ったなんておっしゃっていますが、お話を聞いていると、どうも専業主婦を一生懸命やられているというふうに私は感じます。その場その場の

我々を取り囲んでいるシチュエーションの中で、まず目の前のこと、与えられたこと、あるいは北谷先生が言うところのミッションというのでしょうか、使命というのでしょうか。それを一生懸命やると、自分がやらなければいけないことが好きになってくる。仕事を愛するっていうことになってくる。

さて、皆様方に様々な形でお話を伺ってまいりましたが、いかんせん時間の制約がございます。まとめるというよりも、一言、今日のテーマに出来るだけ接近した形で、簡単にお話していただけたらと思っております。

それでは、高瀬先生からお願いいたします。

高瀬：私はあることで次のような経験をしたことがあります。ある大手の都市銀行の頭取さんにお会いした際のことです。その経験がその後の私の将来を大きく左右することになりました。そのあることとは私をスカウトしてある職に就任するよう期待されたことです。私は依然として学問・研究を続けたいということで、そのお話はお断りしました。そのときの別れの際に「乞食になっても今後願いますようなことはないと思います」と言って別れました。

ところがそれから数日したら頭取さんから速達がきました。それは頭取さんがある雑誌に掲載した「乞食になる三つの原則」という原稿のコピーでした。乞食になる三つの原則とは（１）落としたものと捨てたものの区別ができるか。（２）地熱で体温をとれるか（当時は街に多くの浮浪児がいた時代）。（３）どんな物でも臭いと思わないで食べられるか。この三つが守れなければ乞食にはなれないということです。

それを見て早速その翌日、私は乞食にはなれませんということで頭取さんに言って、前の私の言葉の取り消しを願いました。そうしたところ頭取さんは私の小稿の意味が理解できたのかと言って、学問研究を続けたら良いということで逆にほめられました。そのことが機縁になって頭取さんが亡くなるまでご厚誼をいただきました。

今日のフロアーには学生諸君が多いようです。諸君等もこれからいろいろな道を歩んで行くことでしょう。そしていろいろな方との出会いをすることでしょう。人との出会いを是非とも大切にしたいと思います。そして気概をもって生きられることを期待したいと思います。

茂木：司会をしていただいた根岸さん。卒業生なもので、卒業生として本日のテーマに関連して何か一言。

根岸：私はこの高崎経済大学で４年間を、茂木教授のゼミで過ごさせていただきまして、その後群馬テレビに入社いたしまして、その後13年間アナウンサーを勤めさせていただいております。大学時代を振り返りまして、私が４年間を過ごした中で、実際にテレビ局に入社して直接的に役に立ったこと、生かされたなって思うことは、テニス部と飲み会とアルバイトです。テニス部はバリバリの体育会系で、そのときに培った体力であるとか、多少なりとも根性であるとか。体育会の飲み会で鍛えられた朝まで粘り強く頑張れるタフさであるとか。アルバイトでは、コミュニケーション能力であるとか、ネットワークを作り上げる能力であるとか。直接的に生かされていることはそうい

うことだなんて実感いたしました。

そういったものをトータルし、最終的には出会えた友達であるとか、先生方であるとか。今回司会という大役をおおせつかりまして、お声をかけていただいたのも、茂木教授のゼミ生であったという縁もあります。高瀬先生にお話いただいたように、いろいろな部活動とか、学校に通う中で出会った人の支えというのは、いろいろな場面で、直接的、間接的に本当に大きかったものです。さきほど学生さんからありましたけれど、何か目標であるとか、夢をもっているとかそういうもののあるなしに関わらず、いろいろな人との出会いとか経験を大切に見過ごさないっていう気持ちで、将来何かに繋がる一番のきっかけになるのかなと思います。

茂木：北谷さん、よろしくお願いします。

北谷：どうもこの大学の教授の先生方は、どちらかというと、学校の先生のプロという方は沢山いらっしゃるみたいです。それをアメリカではピュアーアカデミシャンと称します。それに対しアプライドスカラー、産学共同の半分ビジネスマンで半分大学教授のような存在が、茂木先生はそうかもしれないけれども、あまり多くはなさそうだという感触を受けました。学生さんの先程の質問を聞いていても、アプライド教授からの刺激が少なく、なんとなくぼんやりした感じでこれから就活が始まる、どうしようかっていう悩みもあるように感じます。我々の大学と比べると、アプライドサイドとのバランスが取れていないというか、補充が甘いのかなっていう気がしました。

今後この学校をベスト・バイ・スクール・オブ・エコノミックスに私は絶対していただきたいと思います。それだけのアカデミック・クオリティをお持ちなので、学生さんのクオリティも高いし、高崎という市場へのエコノミック・アドバンテージもあり、歴史もあり、トップスクールとして生き延びていくだけのクオリティは備えられているわけです。あとどうすれば良いかというと、アプライドスカラーをもう少し採用されることだと思います。そういうバリューが違う先生方が入ってくるとピュアーアカデミシャンは嫌がるんですけども、その二つのグループの教授を上手く共存共生させることによって一番ベネフィットを受けられるのは学生さんたちなんです。学生さんたちがどれだけ教務に対し影響力があるか分かりませんが、この次の次元に進んで、さらに学ぶことの意味やベネフィットを追求して行くアプライドスカラーの採用を積極的にされ、それによって学生さんたちに最大限の還元をするっていうのが、一番この大学には良いのではないかと思います。

茂木：私もまったくそのとおりでと思います。われわれ自身がそうあらねばいけないと、あらねばというところとちょっときついですけどね、やってみたいなあとは思っております。林さん、一言お願いします。

林：自分自身が大学時代から仕事を始めてしまったので、今日の私の話は、特にこれからの日本経済を支えて行く原動力の一つとして、起業家という道、すなわち若い人が自分で自分の夢を実現し、自分の仕事に結びつけていくことがとても重要だということを申し上げました。「人集め力」とか、「金集め力」とか、そんなこと、最初から誰もできないんです。それらはもともと持っているわけ

じゃなくて、学生の身分ではそんなもの無いに決まっています。ただ、自分に夢だとかやりたいことがあったときに、そこで実現するためには金を集めてこなさなきゃいけないし、人の協力も得なきゃいけないということを言いたいんです。そのためには、動かなきゃいけない。動いたらそういう力は結果的についてくるって僕は思ってるんです。ですからそういう形で、私は自分の夢や、やりたい道に進んでいってもらいたい。

でもね、全員が全員自分のやりたいことがはっきりしているわけではないから、単に起業家っていう道だけではなく、優秀なビジネスマンだっています。ですから大学時代に総合力を身につけて欲しい。総合力を身につけることによって創造的な発想ができ、あるいは自由に行動する力を身につけることによって優秀なビジネスマンとして日本の産業・経済のために貢献していける。そんな生き方も出来ると思うんです。一番問題なのはサラリーマンという生き方です。なんだかわからないけれど企業に就職してしまって、たいした利益ももたらさないのに給料をもらってですね、まあ、夜は自分のストレスを解消するために飲みに行く。サラリーマンっていう人種を冷やかしているわけではないんですが、そういうひとが圧倒的に多いんです、日本人は。本当にそれで良いんですかってことを、学生時代に考えておいたほうが良いということを申し上げました。

つい先日、ある経済紙（週刊「東洋経済」2007/10/13）で大学の特集をやっていました。その中で、大学別生涯給与獲得ランキングっていうのがあって一位が一橋大学の出身者なんですね。その獲得生涯賃金ですが3億2000万円でした。30歳の平均モデルの年収が670万円って出ていました。私から言えばただか3億円なんですね、安い。一橋を出て優秀なビジネスマンになって優秀な仕事をしてたのかもしれないけれど、3億円なんて今20代で、ITバブルとかありますけど、キャピタルゲインにのってですね、難しく無いとは言えませんが、そういう事例は沢山出てきます。ですから、もちろんお金のために働くわけじゃありませんけれども、自分の人生をどういうものにしていこうかという設計図の中で、どのように自分が報酬を得、そしてまた時々、自分がやりたい仕事をやるってどういうことかを良く考えてもらいたいと思います。大学というのはそのための最後のモラトリアムの4年間だと思っています。

茂木：牛尾さん、よろしくお願いします。

牛尾：今、ふと思ひ出したんですが、新入社員でも数千万円の年収をもらえるような、まあ、今飛ぶ鳥も落とす勢いのある外資系の金融機関の人事担当者から聞いた話です。その担当者自身も東大法学部を出ている方なんですけれども、我々が東大を出た頃は、こんなことを勉強したよっていう程度で就職に臨んでいましたけれども、「私は東大法学部を卒業しました。司法試験に通過しております。ついでに公認会計士も取りました。もちろん英検は一級です。いかがでしょうか」という形で、私を取らないっていう選択はないだろうと完璧に武装して、あー、恐れ入りましたっていう学生が、ぱらぱら受けるようになってきて本当にびっくりします。最近の学生にはすごい子っているんですよっていうお話でした。で、その人どうしましたかって聞いたら、もちろん結構ですってお断りをしましたっていうことなんですね。完璧なスキルと知識を身につけてきて、それはそれ

ですばらしいとは思いますが。頑張る力も評価に値する。しかし、能力はこれだけあったらお金はいくらみたいなの形、そういう発想の人を取りたいとは思わない。大学時代にいろんなことを身につける。知識や能力、スキルっていうのは、もちろん身につけてこれでもう十分っていうことはないです。だからそれらはもういっぱい身につけられるだけでももちろん勉強して欲しいと思います。しかし、基本となるのはやはり人間としての心です。人間的な部分っていうのをやっぱり一番大切に考えていきませんとダメです。企業の採用担当はそこまでちゃんと見ているわけです。やっぱり大学時代にすばらしい人との交流、人との出会い、人間として生きる道とは何なのか、という本当に根源的な部分を大いに養って欲しい。本当に利害に関係のないお付き合いができるのは、もしかして大学が最後のチャンスかもしれません。それを大いに養って欲しいというのが私から最後のメッセージです。

茂木：平山さん、一番平均収入が高い大学の社会学部卒業生として一言。

平山：会社に入っているだけでも良かったのかなって思ったんですが、会社生活っていうのは本当にこの4月からしかやったことがないんです。

先日、「働きマン」ってドラマを見ていたら、主人公の松方弘子が「目の前の事を一生懸命やるしかないのよっ、自分のためには。」って言ってたんですが、けっこうあれはあたっているなと思います。まあ、ドラマの中ですが、女性の方がそういう台詞を吐いておかしくない時代が来ている。自覚があってそこまで行き着く人と、なかなか行き着けない人とがあるとは思うんですけど、彼女は実践の中で何かを学んだんじゃないかなって思うんです。

今日のテーマ「学ぶ」っていうことでいうと、ちょうど大学時代に音楽が好きになって、いまだにライブに行き続け、CDも聞いています。僕が一番学んでいるのはやっぱり音楽からで、しかも、自分より年下の人が歌う歌から学ぶことが多かったりして、それが、この道に入ってすごい良かったなって思うことなんです。昨年には、生涯見たライブは4000本を越えて、何とか5000本まで見ようと思っています。2007年に見たライブですごく感動したのは、L'Arc~en~Ciel っていうバンドが久しぶりにホールツアーをやって沖縄のファイナルを見たんですけども、すばらしいバンドになっていたこととか、先日は MISIA っていう歌手が台湾でライブをやったんですけども、向こうの人たちが大合唱する“Everything”日本語バージョンっていうのがすごく良くて、ついこの間は Zepp 東京というところで、ACIDMAN っていう元気のいいバンドと10-FEETっていうバンド、それから RIZE っていうバンドのギタリストは Char の息子さんの JESSE っていう子がやっていて、彼らはもう10年のキャリアになるっていうことだったんですけども、彼らの歌で「平和」っていう歌がありまして、歌詞の中に「平和という言葉が懐かしい」というフレーズがあって、そういえば、彼らが物心ついてから平和という言葉があまり新聞に出てなかったんじゃないかなって思うんですけど、そういう歌を、若い人が同じ年格好の人の前で歌うのを聞いていると、非常に感じる事が多くて、ずっと自分は「音楽は感受性のミューズ」っていうテーマで評論の仕事をしているんですが、ずっと学び続けていて、これは3億円にはならないですけど、非常になんか良

い人生の今途中だなんていう感じです。

茂木：金井先生、最後に一言おねがい申し上げます。

金井：私も大学にいる人間として、メッセージです。

例えば、よくあげられる例ですが、ウニを食べたことがない学生にウニの味をどう教えるかっていったら、ウニを食べさせるしかないですね。子どものときに食べたら多くの人が言うほどおいしくないで食べるのをやめる人もいます。おいしくないわりに高いなって思ったら食べるのをやめる。そうするうち、節目がきて、目の前でウニをあんまりおいしそうに食べている人がいたら、食べてみる。その時にはたまらなくおいしいと感じるかもしれない。

少し奇妙な表現ですが、「人生には二つの困ったことがある。一つは願いがかなうこと。もう一つは願いが決してかなわないこと。」これは、オスカー・ワイルドが言った言葉と書いてあるものもあるし、ほかの人と書いてあるものもあります。さっきの旅の話と似ていて、旅は希望を持って歩く間が楽しい。問題は、夢というものをどの時間幅で見えるかなんです。あまり遠くを見すぎていると、もうちょっと近くのことを考えたいし、次の日のことしか考えていなかったら、もうちょっと先、1年ぐらい先のことを考えた方が良い。近くを見すぎている人には、もうちょっと遠く見ることを勧める、遠くを見すぎていると、もうちょっと近くを見ることを教える、そういうことを思いました。

「遊び」に関して最も深い発言をなさったのは、甲骨文字学者の白川静先生だと思うんです。「遊」って字は大本の意味合いは氏神の旗印をもって慣れ親しんだ場所から動いて行く姿です。だから遊牧民の「遊」だとか、ハンドルに遊びがあるっていうのが原義に近いんです。だとしたら仕事の中に遊びがないと思ってしまったら動きが止まってしまうし、その遊びの中の感覚もぎこちなくなる。いい形で歩むっていうか、遊牧民の遊が遊びだっていう感覚で、どうせ旅するならプレイフルに旅する、そういうことを感じました。

ユングが70歳になるまで我慢して言わなかったことなんです、因果でなければ説明できないような起こって欲しいできごとが念じる気持ちが強ければほぼ同時に起こることをシンクロニシティと呼んだ。朝起きて、魚にまつわる文献を読み、物を書き始めたらその日に久しぶりに会った患者が魚の絵を持ってきて、今日は何の日かって思ったら4月1日、魚を食べる日だった。夕刻には長らく会っていなかったクライアントが夢の報告をし、その夢では池の中から自分に向かって魚が飛び出てきて自分の足に飛びついた。その日に刺繍をくれた人がいて、その刺繍を見ると刺繍には半分魚で半分動物の刺繍がしてあったとか。ある意味、やや病的というか少なくとも神秘的なのですが、本当に成し遂げた人を見ると、最初に望みがあって、そのために出会いがあって、その出会いを見逃していないんです。「行き当たりバッチリ」とMBA金井ゼミでは呼んでいます。ですから、もし夢を持って入った時に少しくらい幻滅することがあっても、本当に好きなことをやっていればエネルギーが出ますし、とにかく止まるってことが一番良くないと思います。動きがあるってことでプレイフルなっていうか、遊びがあって、時間幅の感覚のシャッフルがあった夢を、ぜひと

学ぶことの意味～あなたにとって学びとは～

も努力して実現していただきたいと思います。

茂木：金井先生の著作の中で使われる言葉に、「ドリフト」というのがあります。わくわくしながらふわふわと漂って、突き当たったものにとちょっとまじめに相手して、かといってこだわらず、そんな感じかなと思います。

根岸：以上をもちまして本日のシンポジウムを閉会させていただきます。本日は長時間にわたりまことにありがとうございました。



注記 本稿は当シンポジウムにおけるご報告・ご発言の全てを掲載したものではなく、その主旨に沿って編集を施したものです。

文責 高松正毅

平成19年11月3日 於 本学1号館 111番教室